
A Beautiful Cleaner

のはら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A Beautiful Cleaner

【Nコード】

N7448X

【作者名】

のはら

【あらすじ】

妙な特技をもつ孤独な大学生と、綺麗好きで、これまた妙な趣味と能力を持つ高貴な美女との織りなす物語。（現段階では、R15指定を解除しておきます。R15的表現を含む展開になったときには、あらかじめ警告させていただきます。）

ブローグ

その日も俺は、アパートの前の枯葉を、箒で掃いていた。

さわやかな朝、日の出が綺麗だ。鳥のさえずる声に気持ちよい朝の風。箒のリズミカルな音が辺りに広がっていく。

アパートの前の道は、車がやっとすれ違ふことが出来るぐらいの幅の道、大通りから少し入っているので、余り車通りはない。ただ、駅が近いせいか、通勤・通学の時間帯には、それなりにリーマン、OL、学生なんかを通ったりする。

額に汗が浮いてきて、俺は少し手を止めた。空を仰ぎながら一つ深呼吸してみる。肺の隅々にまで、朝の香りが行き渡るを感じた。今日も良い天気になりそうだ。そんなことを思いながら、もう少しだと口の中でつぶやいて、落ち葉を掃き集めていく。

名前は、あまやま しゅうすけ雨山秋介 大学3年 理学部で一応、生化学系。

俺がこんな朝早くから、ボランティアみたいなことをし始めたのは、今から2年ぐらい前である。

道路の脇に山になつてゐる落ち葉が、アパートの自転車置き場に自転車を入れるのに邪魔だったので、掃き寄せたのが始まりだった。そのことを大家さんが見ていて、とても有難がつてくれた。それからなんだか止めようにも止めることが出来ず、結局、まる2年、毎日こうして道路を掃いてきたのだ。

初めは義理で仕様がなしにやっていたこの作業だが、そのうち、それはそれで面白いと感じるようになった俺であった。

なんと言つても、やっぱりキレイになることは、気持ちが良いことである。

出勤・登下校時は、結構人通りがあるこの道。吸殻や空き缶、時には弁当ガラなどが転がっている。

そんなゴミが醸し出していた退廃的な雰囲気が、俺が掃除をするようになって、このアパートの前ではなくなった。

疲れて帰ってきたとき、すっきりとなっている風景に、何度、心慰められただろう。自分でやっていることなのだが、妙にありがたく思うのだ。

他にも楽しみがある。

それは季節季節に道路が装いを変えることに気づいた。春の桜の花びら、ツツジの花がら、夏は毛虫が落ちていたりするが、秋になると桜、楓、紅葉、ポプラ、銀杏……、木々がもたらす色とりどりの落ち葉は、殺伐とした道路を、見事に染め上げるのだ。

俺はその木々たちのもたらしてくれた、美しい落ち葉を集めながら、今までの人生でこれまでになかった程、時間、季節、自然、小さな命などなど、沢山のことを感じ、それらに対して、なんとも言えない親近感と、愛着を覚えるこのころである。

「おいミミズ、そこに居たら危ないぞ。」

俺は枯葉の下から出てきたミミズを、ヒョイとつまんで、そばに有る茂みの中に投げ込んだ。ミミズなんかちよつと同情したりして、俺って心なしか、優しくなったのかも……

と、ちよつとナルシストっぽい妄想に走りかけたとき、自転車のフライホイールのシャーという音が、僕の後ろを通りすぎていった。

やべ、今の独り言、聞かれた？

自転車の音が遠ざかって行ったのを確認し、おもむろに振り向いて、その自転車で行ったであろう先に目を向けた。

見るとブロンドの腰まではあるであろうロング・ヘアーの女の子が、サラサラと髪をなびかせ、自転車をこいで去っていく姿が見えた。

実はあの娘、毎日、この人通りの疎らな時間に通るのだ。

いつも私服なので大学生、いや、私服登校の高校があるらしいから、もしかすると高校生かもしれない。

たまにちらと顔を見るのだが、ブルーの目で堀の深い、典型的な欧米の白人って感じの娘である。

それと……まあ、相当な美女であったりする。

はつきり言うと、スクリーンの中ならまだしも、リアルではこれまでの人生で、あの人より綺麗だと思う人には見たことが無い。

その整った顔立ちと、清楚な雰囲気。チラ見でも超美女と認識せざるをえない彼女は、俺的には、まさに美女というものの典型のようには思えた。

ほとんど毎朝すれ違っただけだが、挨拶すらかわしたことが無い。当然、興味が無いわけではない。が、接点がなさすぎる。

それにだ、万が一、声をかけるチャンスが有ったとしても、俺は英語すらまともに話せないわけで、きっと妙な顔をされるか、気持ち悪がられて終わりとなるであろう。

そして最後にはこう思う。

……まあ、どう考えても、釣り合いもしないしな。

ルックス的にも、能力的にも、何の良いところもない俺。近くに
いる女の子と付き合うことすら、夢のまた夢なのだ。

その上、外国人の超美女

まじめに「何か」を考えることすら、アホらしくなる。

でもそれでも良いのである。

手の届かない人とは知りながら、ただ眺めるというもののそうは悪
くはない。

それはまるで、空に輝く月を愛でる様であり、美しく紅葉で色付い
た山々に息を呑んで感動するようであり、眼が覚めれば消えていく
美しい夢に、心をときめかすようでもある。

それらは皆、昔から人々が飽きることなく、愛してきた美しいも
のたち。

……僕はあの人を、そんなものの一つとして、眺めているだけで良
いのだ。

ただこの毎朝の道路の掃除が、こんなに続いているのは、あの女
の子も一因であることは、間違いないことであつた。

第1章 1

三回生になって、午前中は講義、午後は練習実験という毎日を送っていた。

講義の内容も、ずいぶん専門的になり、高校の時の復習みただった2回生までとは違って、ちょっとまじめに取り組まなければいけなくなったなと感じていた。

俺が所属しているのは、室内楽同好会。

しかし所属といっても、最近の実験が終わってからなので、練習の最後にちよつと顔を出すぐらいしかできないでいる。それでも、気分転換になるからと、週に何回はサークルに顔を出していた。

俺の楽器は、ヴァイオリンである。

親父がヴァイオリンに憧れていたという理由で、息子の俺に習わせた。小さい頃はいやいや引つ張られてレッスンに通っていたが、中学上がるぐらいから結構好きになって、高校の受験期に入るまで、続けていたのだった。

ただ、技術のレベルといえば、「どうにか続けていた……」という感じの、ちよつと残念なレベルである。

サークルのメンバーは、全員でも十数人。その中に、俺みたいに授業や就活なんかで、サークルに出て来れなくなった人も何人かいて、実際練習をしているのは十人弱である。

楽器といえば、ギターを含め弦楽器各種、管楽器、ピアノ、シンセなどなど、好きな事を好き勝手にやっている。

言ってしまうえば、趣味で楽器やってるんだが、アパート生活で練習場所に困っていたやつとか、一人で弾くのは寂しいから、仲間が

欲しいやつとか、そんなののゆるい集合体。

だから日頃の練習も、思い思いの曲を持ち寄っては、気の合うメンツと適当に合わせているみたいな、なんちゃってサークルの典型であつた。

といつても、たまには活動らしきこともする。

メインは学祭の時のステージ、それと新入生勧誘のためのサークル紹介の時のデモ。他には時折舞い込んでくる、自治会とかそういうのに行つて、弾いたりすること。

「あ、雨山さん来たんですね」

「ああ」

もう外は暗くなっている。蛍光灯の間引きのせいで薄暗い階段を上つていくと、がらんとしたロビーがある。そこが、俺たちの練習場所。

声をかけてくれた人は、2回生のヴァイオリン弾き守山さん。上品なお嬢さんって娘。他にもいつも元気な2年のヴァイオリン、小竹君。無口な俺と同級のチェロ大林、それと同じく同級のヴィオラ弾き時任。

丸く輪になつてカルテットをして遊んでいた。

「調度良かつた、先輩も入ってください」

「そつか、じゃあ、お邪魔しよかな」

俺はロビーの端にある椅子の上でケースを開き、肩当を付けて弓を張り、準備する。

「A、くれる？」

「ハイ」

守山さんが、チューニングをするために、Aの音を出してくれた。

俺はそれに合わせる。

「良いですか？」

「あ、ども」

「じゃ、よろつか」

時任さんが、俺の準備が出来たので、そう声を掛けた。

今日はモーツアルトのディヴェルティメント（喜遊曲）一番

秋の夕暮れ、楽しい快活な旋律が、薄暗い講義棟に響いていく。

……もう、落ち葉掃きも、終わりだなあ。

こすり合わせる手に吐く息が白い。

12月の初め、桜の葉は終り、綺麗な黄色をした銀杏の落葉も、あと少しで終わってしまう。大量の落ち葉のせいで、あれだけ大変だった街路掃除も、この頃、ずいぶん早く切り上げられるようになった。

一方、冬至が近づいてきて、早朝の温度はすっかり冬の温度。日の登る時間が遅くなり、まだ薄暗い時間の作業。手もかじかんでくる。

でも、こんなピリツとした空気は、嫌いではなかった。掃き始めてしまえば、直ぐは寒くても、ホカホカと暖かくなってくるし。

俺は散らばっている落ち葉を集め、ピークからするなら、何分の一の小さな山を作った。

「おっと、俺としたことが」

手元にちりとりがないことに気づいて、急いで取りに行った。

その瞬間、危惧していたことが起こった。やっと山にした枯れ葉が、いきなりの突風に吹き飛ばされたのだ。

急いでチリトリを掴み、舞い上がって飛んで行き始めている枯葉を、ダッシュで追った。

「キヤー!!!!」

俺は叫び声ではつとし、そっちの方向を見たら、目の端に突っ込んでくる自転車をキャッチした。必死で避けようと横っ飛びするも、情けないことに着地に失敗した。

「痛つつうー」

尻餅をついたが、咄嗟のことで、変な手のつき方をして捻ってしまった。

一瞬間をおいて、ガシャンと自転車が倒れる音がしたと思ったら、背中の方から、カツカツと駆けて近づいてくる足音が聞こえてきた。

当然それは、このハプニングの相手方のそれである。この事故の原因は、言うまでもなく不注意な俺の飛び出しにある。相手の自転車を運転していた人に謝らなければと、痛さを我慢して必死で頭を回転させる。

「あ、済みません、飛び出ししちゃって」

そう言いながら、そばで立ち止まっている自転車の主を見上げると、

そこには青い顔をした例の女の子が、金色の髪をなびかせ、青い瞳の目を見開いて立っていた。

南の海のように、澄んだ青い瞳。

絹のように滑らかな頬

朝日の日の光に、本物の金のようにキラキラと輝くサラサラの髪

……

俺は思わず、痛いのも忘れて息を呑んだ。彼女も俺を見詰めたまま、固まってしまっている。

初めて感じる時間の流れ方だった。

一瞬のようで、永遠にの様に永い「時間のフラグメント」

いつまでも残る何かを、俺の心の一番深いところに刻み付ける。

（あつ、そうだ、日本語じゃダメだ）

我に返った俺は、頭で必死に言うべき英語の文章を構築し始める。そうしているうちにブロンドの髪がサラッと揺れた。思わず向けた僕の目には、度アップの彼女の顔が飛び込んできた。見るとその目に、涙が溜まっている。どうにかしなければと、うるたえているが良く分かった。

（ちょ、ちょっと、近い……）

息もかかりそうなくらいの距離にまで、迫ってきた彼女の顔に、俺は完全にパニックってしまった。ほとんど反射的に、まだ手は痺れていたけれど、無茶苦茶に立ち上がろうとした。彼女はビックリした顔をして、今度はそんな僕を止めようと手を伸ばした。

そして、小さなピンク色の唇が動いた。

「ダイジョ……」

僕を引き起こそうとした彼女の手から、際どいタイミングですり抜けた俺は、後退りしつづどうにでもなれと、片言の英語で必死に応じた。

「ア、アイム ソーリー」

「アノ」

彼女、手をさし伸ばしたまま、ビククリした顔をする。

「ノー プロブレム！ ドント マインド、ドント マインド……」

「デモツ」

「アイム オーケー！ オーケー！！」

「エツ？」

「ノー プロブレム」

俺はノープロブレムを連呼し、彼女の口を封じつつ、踵を返して一目散に自分の部屋に駆け出した。そして碧眼の美女が、啞然として見守る中、一目散に部屋に飛び込んだ。

「もう、酷いなあ」

一人取り残された、少女は一つため息をついてそう零すと、今、

目の前にいた青年が飛び込んでいったアパートのドアを、口を尖らせて見詰める。

「オバケに会ったみたいで、逃げ出さなくてもいいんじゃない……」

不満を述べる言葉には、少なからず落胆の色が伺えた。

彼女はもう一つため息をつくとき、くるつと振り返って、自分が投げ出した自転車に近づいていった。そして、ヨイショつと自転車を起こすと、また今しがた逃げていった青年の部屋のドアを見詰める。

「でも、本当に、大丈夫なのかしら」

彼女はまたしばらくドアを見詰めていたが、足元に視線を落とすと、そこに箒が投げ出されているのに気付いた。

「あ……」

何を思ったのか、自転車のスタンドを立てると、すつと身をかがめて、白い手でそれを取り上げた。そして、風で吹き飛ばされ、崩れていた落ち葉の山を、もう一度、丁寧に作り始めた。

シャ、シャ、シャ

ずいぶん慣れた手つき。落ち葉たちは、いつもとは違う主に操られた箒により、あっという間に綺麗な山に戻った。

「これで、良いかしら」

手を止めると、満足そうにそう言って、キョロキョロと辺りを見回し、アパートの階段側に、チリトリが転がしてあるのを見つけた。カツカツとヒールの音を響かせてそれに近づくと、相当使い込んであり錆くれてもいるそれを、何の躊躇もなく取り上げ、枯れ葉の山の所に戻るのだった。

部屋に飛び込んでからも、なかなかドキドキが収まらない。

自分の今しがたやってしまったことが、頭の中でエンドレスでプレイされる。はつきり言って、これ以上無いって位の惨めな醜態。恥ずかしさと情けなさ、胸に込み上げ俺を飲み込んでいく。

俺はぎゅっと両手を握り締め、玄関先で靴を履いたまましばらく立ち尽くしていた。

こんなの見せちゃったら、もう、ダメだ……

二度と、彼女の前に姿を現すことは出来ないと思った。

そう思うと、今度はこの二年間、毎朝、通っていった彼女の姿が、次々と脳裏をよぎっていく。

（俺、何でこんなにあの人のこと、覚えているんだ？）

正直、めくつてもめくつても終わりが来ないアルバムのように、止め処もなく思い出す思い出のシーンに、自分自身でもビックリした。そして俺は初めて自覚したのだ。どれほど自分にとって、あの人が大切な存在になっていたのかと。

つい今しがた、俺は初めて彼女とともに顔をあわせた。ちゃんと成り立ってはいなかったが、会話もした。

正面から見た彼女、申し訳なさそうな表情、心配そうに向けられた青い目、それと、思ったより高く、とても澄んだ声……。

全部、初めてだった。

そして、俺が今日まで、拾ってきた一瞬のシーンを継ぎ合わせてつ

くつていた、彼女という存在とは比べ物にならないほど、実際の彼女は魅力的に思えた。

でももうダメなのだ、もうこれ以上、あの人には関われない。あんな醜態を見せ、……そして、こんな気持ちになってしまっているからには。

一つ、大きくついたため息がやけに熱い。あれ？　なんだろう、気が付いたら、目に……。

俺は本当に久しぶりに、滂沱と涙を流した。心にぽっかりと開いてしまったこの空洞。その余りの大きさに気付いたからには、それしか出来なかった。

もう落ち葉の季節も終わった初冬の、
2年続けた、朝の掃除は終わった。

第1章 2（前書き）

かなりの箇所、訂正しました。（11/1 現在）

第1章 2

クリスマス、正月、世の人々は続けざまにくるビッグイベントに、こぞって浮き足立つこの期間、俺は例年のとおり、悲しい程に落ちて着いた毎日を過ごしていた。

……というか落ち着くどころか、例年以上にズドンと重い時を過ごしていたというのが、本当のところである。

俺の心を、こんな喧騒の中ですら、鉛のように重くしていた原因。それは言うまでもなく、あの1ヶ月ちよつと前に起きた不幸な事件であった。

俺はあれから、気が付くと、脳裏であの時のことをリプレイしている。

こっちに向けられた、あの青い目の眼差し。そして、その視線から不様に逃げた自分……。

冷静になった今なら、はっきりと分かるのだ。あの目は決して、俺を非難したり、軽蔑したりしていなかった。いやいや、それどころか、心配とか、謝罪とかそういう色すら帯びていたのだ。

そこで思わず拳に力が入る。

そうなのだ、あの事件は、やり様によつては、千載一遇のチャンスに成り得た出来事だったのだ。

しかし俺ったら、そのチャンスを、普通だったら有りそうもないヘマをやらかし、かくも惨めな大敗を喫し、今となつては取り返し付かないことになった。

ひとつ、ため息……

俺の人生なんていつもそうだ。ラッキーを呼び込む体質ではないくせに、偶に回ってきた希少なチャンスを、必ず、有り得ない大失敗をかましてパーにするのだ。

この生まれ付いた質は、自分ではどうしようもない。きっとこれから、どんな風に、失敗ばかりを積み重ねた人生を送るんだろう。

更に、ため息……

そうしているうちに、うちの大学も受験のシーズンが到来する。

そして今日はセンター試験の二日目であった。言うまでもなく、うちの大学も会場になるので、夕方の試験終了までは構内に入ることはいできない。

俺たち三回生は2月終わりの卒論発表会の時、卒論せいの先輩の司会をすることになっている。実は今晚、その打ち合わせをどうしてもしたいということで、ペアになる卒論生の先輩から、呼び出されていた。

俺は指定された時間に間に合うように自転車でアパートを出た。いつも通る道だけれど、ちよつと雰囲気が違う。ホツとした空気に包まれた、受験生らしきのグループがあちらこちらに見える。数年前、自分たちも同じようにして、この学校に着たんだなと懐かしく、また一つ先輩になるということが、ちよつと嬉しくもあった。

もうすぐ、校門だというところの信号に引っかった。ヘッドライトをつけた車が、一斉に目の前を通り過ぎていく。信号のところに街灯があり、そこには何人かの人々が信号が変わるのを待っていた。

俺はもう見えてきている、うちのキャンパスの校門を伺いながら、これからもたれる打ち合わせについて、あれこれと考えていた。

去年の卒論発表会は、ちょっと顔は出したけれど、直ぐにサークルに行ってしまったので、参加してないに等しい。そんな状態で司会をすると言うは、正直、不安があった。

そんな悶々とした気分、また溜息をついているうちに、横に立っていた受験生らしい女の子が、こつちをジロジロ見ているのに気づいた。

俺はなんだか、それを直視してはいけないような気がして、横目でその視線の主のことを観察すると、背の高さは俺と同じぐらい、ショートカット、チェック柄のベージュ色のマフラーをした、地味な女子高生という感じであった。

その娘は初め俺が気付いた時から、俺への一向に視線を切ろうとせず、まじまじとこつちを見つづける。

……一体なんだ、この娘

いくら女つ気が無いといっても、こんな風にされたら気持ち悪い。横の信号が横の信号が黄色になり、さあ、こつちの信号が青になったら、一気にスタートしようと、ペダルを一番力が入る場所にセツトし、いまや遅しと青信号を待ち構えていた。

その時、横から声がした。

「すみません!!」

俺はスルー。

「あのう、済みません!!」

信号待ちをしていた人皆が何だ何だと、キョロキョロと周りを見回す。そして俺を必死に見つめている女の子に気付き、一様にホッとした顔をして、そそくさと渡って行った。

信号はそうしているうちに点滅しだし、赤となる。僕ら二人は渡ることが出来ずに立ち止まったまま。その娘はハッとしたような顔をして、頭を下げた。

「あつ……申し訳ありません……でした」

こんな雑踏の中で、いきなり知らない男に大声で話かけるなんて、一体、何だ、ちよつと、色々と問題のある娘かと思っただが、その誤っている様子は、変どころか気品すら感じる。こういうところ見ていると、そうではないのか？

街路灯の薄暗い光、マフラーで口まで隠れ、さらに眼鏡をかけてるので、顔は良く分からない。手元を見ると高校生が持ちそうなバックがあり、やはり初めの印象どおり、センター試験を受けた受験生の様だった。

「なんででしょう?」

警戒を緩めず、ちよつと迷惑そうな固い声で応答した。するとその娘は更に小さくなって、虫の声のような小さな声で、何かボソボソと呟いてたが、そのまま黙りこくった。

そんな僕らの周りに、また信号待ちの人たちが溜まってくる。向き合っただけにやらやっている僕らの様子を、信号待ちの人たちが、しきりと伺っているようである。

俺としては、人の視線に晒されるのは嫌なので、すぐにも立ち去りたいと願うも、相手の女の子は黙ったまま、次を言わない。しばらく待っていてもそうだったので、もう良いのだらうと、見切りをつけサッサと行こうとすると、今度は慌てたふうに大声で言った。

「あ、お待ち下さいませ!!」

「え!?!...ま、ませ?」

や、やっぱ、俺なの?

こんなにツツケンドンにしたし、黙りこくっているから、このまま、他の人に行くかと思ったら、そうではなかった。どうも俺は、この娘にロックオンされたらしい。

.....やばいんじゃない、これって??

スーカー?!

俺は本気でゾツとした。

「ま、待ってください!」

これは逃げるしかないと行ってしまおうとすると、その娘は、今度は泣き出しそうな声で呼び止めた。

「駅行きのバスに乗るのには、どちらに行けばよろしいのでしょうか?」

何かと思ったら、そんなことを聞くために.....って、俺はその必死な形相に、目を丸くして固まった。

なんか、まじ泣きしてる……。

しかし事情を知らない通りかかった人たちは、皆一様に、男が女の子を泣かせていると、人だなしを見るような蔑みの目で、俺をチラ見して通り過ぎていく。

別に俺は泣かせるようなことしたつもりはないぞ！と主張すべく、ギツと彼女を見据えると、街灯でキラキラ光る眼鏡の向こうには、ちよつと上目遣いで涙で濡れた視線があつた。

あれ？！

その視線に出会ったとき妙な感触を感じた。

……これって、既視感？ と、この声

俺はビククリして、視線をそらす。何故か心臓がいきなり早く鼓動を始めた。

しかし困った。いくら泣きながら聞かれても、俺は余りバスなんて乗らないから、バス停とか、どのバスに乗れば良いのか、口先で直ぐには答えることができないのだ。

じゃあさつさと「分かりません！」と断ればいいのだろうか、今までの遣り取りで、こんなに凹んだ顔をする女の子に、連れ戻し返事をするなどんなことになるのか。

もしかしたら、号泣されるかもしれない……

街中で、しかも自分の大学の門前で、高校生の女の子を泣かせるなんて、それこそ、どんな誤解を招いてもおかしくない行為であり、場合によっては何がしかの処分とかになったりしないだろうか？

「あ、じゃあ、ちよつと良いですか？」
「え？」

俺はその娘を連れ立って、学校の先にあるバス停まで、自転車を押して歩いていく。彼女は言われたまま、僕の後に従って来た。

数分、行き交う人を避けながら歩道を歩いていくと、大通りに出る。そこには大きなバス停があった。

夕方のこの時間、結構、バスがやってくる。

「ええと、このバスは市民病院行きだから、あ、あれだ。」

「え？ はい」

「12系統だと、どれも駅に行くみたいです。」

「す、すみません……」

その娘は、さっきの強引さが嘘のように、こっちの方が申し訳なく思っぐらい恐縮した。

「失礼ですが、……こちらの大学の学生さんでいらっしゃいますか？」

「ええ、まあ」

俺は頭をかきかき、その娘の質問に答えた。それにしても、やっぱり無用に丁寧な言葉遣い。

「そうでいらっしゃいますか」

そう言うと、フツと嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ、これで」

「はい、本当に、ありがとございました」

なぜかその娘は、親しげに手を振って俺を見送る。バスの乗り方を教えてやっただけで、こんだけ親しげにするってのは、やっぱり、そうとうイタイ娘なのか。

悪いけど俺の中に残ったのは、ワクワクとか感動とかとは全く違って、腑に落ちないモヤモヤした物だった。

俺は思わぬ時間を浪費してしまったと、急いで自転車に飛び乗り、さっき来た道を逆行していく。

しかし思い出してみると、見た目は真面目そうで、よく見るとかなり整った顔つきをしていたようにも見えた。

それなのに、見も知らずの、しかもイケメンとは程遠い、オタク系のオーラを背負った俺なんか、何だあの笑顔は？！

ちよつとあの娘の親に、「人に接するときには、もっと慎重にするように」と教えてやれと言いたくなつた。

兎に角、妙な出会いだつた。

しかし、この時既に、僕が今まで考えたこともないような人生に、足をつ突っ込み初めていただなんて、知る由もなかった。

第1章 3

二人の出会い、すなわち、センター試験から遡ること約二週間。

新年の授業が始まったその日、小さいながら良家の少女達が集まる、名門・聖パウラ学園の、いつもなら静かで凜とした雰囲気の漂う校内が、騒然としていた。

その騒動の真ん中にいたのは、黒髪のショートカットの少女。

リリ様、どうされたのかしら？ なにか大変なことでも、おありだったのかしら……

遠巻きにその少女を囲んで、心配そうに胸に手を押し当てる生徒たち、中には悲鳴のような声を上げる生徒もいる。と言うのは、この年末まで、その少女はだれでも目を奪われるような金髪と、海のような深い青色をした碧眼を持っていたのだから。

その日、その黒髪の少女が行く先々で、彼女を取り巻く者は皆、顔を曇らせ、心配そうに囁きあうのだった。

実はこの黒髪の少女、高等部三年、リリ・フォン・ハープスト、すなわち日本名にして戸籍上の名前 秋山百合恵その人こそ、由緒あるこの学園の生徒会長であり、ここに属する少女たちのなかで、屈指の良家、中世から続くヨーロッパの大貴族の出身であった。

しかし彼女はそのような出自を笠に着ず、高貴な雰囲気は漂わせつつも、誰に対してもいつも朗らかで、優しく丁寧に接するのが常だった。

その上、金髪碧眼を備えたその美貌は、全生徒の憧れの的であり、彼女自身の目立ちたくないとの願いとはかけ離れ、生徒たちのみならず職員一同に至るまで、彼女をこの女学園の王女のような存在と見なしているのだった。

彼女の直ぐそばにいつも控えている、栗色の髪と目を持った少女は、アンナ・ブルームという。彼女はリリの幼馴染であり、正式にハープスト家から、リリの付き人としての任を与えられている人である。

「リリ様、やはり、皆さん、少なからず驚いておられますよ。」

アンナの言葉には、親しさの中にも叱責の色が伺える。リリはアンナに肩をすくめて見せた。

「なぜ……、あのように綺麗な御髪とお目でいらしたのに……」

リリが一向に真面目に聞こうとしないので、アンナは今にも泣きそうな声でそう言った。

「だから言ったでしょう。アンナ、わたくしは日本人ですよ。ですから、こちらの方が本当は自然なのです」

「そのような……」

アンナは納得できないような顔をした。

誰もがうらやましがった、あの彼女の純金のようなブロンドの髪と美しい碧眼とは、その髪の毛は肩の上まででバツサリと切られ真っ黒に染められ、目はカラーコンタクトが入れられて、黒い瞳となっているのだ。どうして惜しまずにいられるだろう。

「今まで、お父様の御遺産に頼るばかりで、わたくし、甘えておりました。これからは本来の身分に戻り、身の丈にあった生活をするつもりです」

「そ、それはどういう意味で……」

愕然とした顔で、思わず歩みを緩めるアンナ。

「みなさん、わたくしのことより、さあさあ、授業の時間です。教

室に参りましょう」

「しかし、リリ様」

「心配はないわ、アンナ」

そう言うのと、いかにも嬉しそうに笑った。それを見たアンナは立ち尽くした。

リリ様のこのような笑顔、いつから見てなかっただろうか？

幼いときからずっと生活を共にし、共に成長てきた女主人リリ。中世から続くヨーロッパの大貴族、ハープスト家の正統の血統を引きながら、母親が日本の一般庶民ということで、一族から受け入れられていない。

父親のカール・フォン・ハープストは、リリの母親・雪子を后と考えていたので、他の女性を決して受け入れることはなかった。結果、結婚はしていない扱いとなり、戸籍上は生涯一人身であった。そして、病弱だったカールは、今から十年前に逝去。母親も後を追うように世を去ってしまった。結局はカールの弟、彼女の叔父であるゾマー卿が家督を継いでいる。

ハープスト家は、素晴らしい実業家の才に恵まれた家系で、カールも知るものぞ知る世界的な投資家だった。そして彼の遺産は今も世界中の銀行にある。

かくして、古来、ハープスト家に受け継がれたものはゾマーが相続したが、カール自身がその才覚で蓄えた膨大な富は、彼の一人娘、リリ・フォン・ハープストによって、よって相続されたのだ。

「短い髪も楽で良いものね？」

「リリ様……」

立ち尽くしたままのアンナを振り返り、そう嬉しそうに言う。軽やかな足取り。

先ほどの笑顔にもそうだけれど、リリ様には確かに、何か心楽しませるものがお有りなのだ。

ただ、わたしにもそれが何なのか、全く見当が付かない。

押さえようのない不安が、アンナの心を圧倒するのだった。

それからの我が主の行動は、私たちの度肝を抜くものばかりだった。

つい先日、もう推薦入学が決定していた女子大学ではなく、ずいぶん都心から離れた、地方の国立大学に行くと言い出されたのだった。

リリ様はご自分で、新たに志望される大学の試験内容などについてもお調べになり、色々なところから情報をかき集め、準備をしていかれた。

リリ様はもともと、大変学業はお得意とされているので、今回の変更では特段、準備が必要ではないようだった。

しかし、驚くことはそれで終わらない。

なんと、わたしの知らない間に、ご自分でその大学の近くの不動産屋を回って、ご自分がそこに行かれる場合に住むことになる、アパートを探してこられたのだ。

しかもその選ばれたアパートはほんの庶民用のもので、リリ様のような方が住まわれるようなところではなかった。

けれども、私たちの慰留に耳を貸されなかった。そしてとうとうリリ様は、センター試験の一週間前、わたしはこれだけで結構です、後は皆さんで御処分くださいと、わずかな身の回りのものをだけを携えて、そのアパートに移られた。そしてそこから、センター試験に出向かれたのだった。

考えてみれば、高等部に上がった頃から、少し様子が変わった。それまで、ここから、お車で学園に通っておられたのが、急に別荘に移り住んで、そこから電車で、しかも一人で通うと言われるようになった。

この時もひと悶着あったけれど、週末には必ず帰るという約束でそのようにされ、結局、ずっと一人暮らしで、電車通学というスタイルを貫かれたのだった。

一体、リリ様の中で何が起きているのだろうか。

リリ様は一向に打ち明けては下さらないし、お側に仕えるわたしですら、情けないことに全く分からない。

いつも朗らかで、私たちの言うことに、逐一耳を傾けてくださる方だけれど、こと御自分のこと、特に周囲に負担になるようなことは、絶対に話されないとこがある。

だから、今回の沈黙が、余計に心配でならないのだ。

きつとりリリ様は、途方もない冒険をしようとしておられるのだ……。

第1章 4

「リリ様、おはようございます」

ドアの向こうに声をかけてから、私は思わずあたりを見回した。少しこのアパートの敷地が他の家より高いのか、家々の屋根の向こうに広々とした景色を、眺めることができた。そこには畑や田んぼが残り、あちらこちらに雑木林も見え、ずっと向こうには山々の姿がくつきりと望むことができる。

うーん、気持ち良い……

キリリと締まった冬の朝の空気。それはとても澄んでいて、清々しい。ちよつと沈んでいた気持ちも、少しだけ軽くなった。

今日、訪れているのは、先日、いきなりお屋敷を出て行かれた、リリ様のアパートある。どうしておられるか、様子を伺うためにやってきた。

昔は何でも一緒にしていて、「ないしょ」など全くなかった私たちであった。なのにこのところそうではない。特に去年の秋以降は、全くと言って良いほど何も話して下さらない。

正直、とても寂しい気持ちだった。話して下さいと頼んではみたものの、お嬢様はただゴメンなさいと謝られるばかり。私は錆くれている、廊下の欄干を指先で弄りながら溜め息をつく。

それにしても、このアパートを借りて一人暮らしをすると言われた時は、さすがの私も声を荒げてしまった。いかに主であられるといっても、こんな大切なことを、一緒に住んでいる私たちに、何も

言わずに決めておしまいだなんて。

未成年のリリ様の後見人であり、家業の一切を面倒見てくれているのが、従業員の盛山さんであるが、どんなときにも、温和さを失わない盛山さんにして、あの時ばかりは思わず声を荒げていた。

でも「止める」とは、言われなかったのだ……

あんなに思いつめたリリ様は、初めて見たかもしれない。平身低頭、これまでの非礼や身勝手を詫びながらも、この計画を中止して欲しいとの私たちの申し出については、最後まで頭を縦に振られなかった。

何でそこまでされるのか、いつもそのことを自問しては、頭を振るしかない私である。

「はい」

余りに軽やかな声の返事がドアの向こうからした。私はちょっと目を瞬かせた。

「あ、アンナ……です」

「まあ」

ガチャガチャと音がして、ギギツとドアが開いた。このドア、かなり建付けに問題がありそうだ。

「アンナ、よく来てくれましたね！」

見るとお嬢様は、白の無地のブラウスに紺のひざ下までのスカート、白色のソックスを履いておられた。頭は言わずもがな、黒の髪の毛でショートカット。私はそれを見て、思わずフツとため息が出る。

……お嬢様のきれいなブロンドは、もう復活しないのか……
それだけでも、私にとっては十分へこむに足る現状だった。

「さあ、お上がり下さいな」

「あ、どうも」

前回来たときは、部屋が片付いていないからと、渋い顔をして、中を見せてくれさえしなかったりり様だった。しかし今日、快く招き入れてくださった。また門前払いだったでしょうかと心配していたので、ちよつとホツとした。

でも、にこやかな笑顔で迎え入れられた私ではあったが、初めて訪れた部屋に入るなり、思わず目を見開いてオーと声を漏らした。

……ボロい

シミの沢山ある天井、日に焼けて色が変わった襖。サツシや鍵はいくらか補修してはあるが、これは思った以上に年季が入っている。次に驚いていたのは、そんな部屋が、ピカピカに磨き抜かれているということである。

「この間は追いつちやってごめんね。でも綺麗になってきたでしょ？ 結構これでも頑張ったのよ」

ちよつと誇らしげなりり様。身の回りのことは自分でしておられたが、お屋敷全体の掃除については、盛山さんが担当している。窓から畳、何から何までの大掃除というのは、あまりなさったことがないはず。

そして、最後……

「お、お嬢様、何です、これは？」

「そんなにビックリしないでよ」

「そうはいきません！」

二間しかないアパートの一室に、ドンと鎮座する水槽やガラスケース……

「やっぱり、ちよつと寂しくなつて」

泳いでいるのは、金魚4匹。上目づかいで、ゴニョゴニョ言うお嬢様だった。

実はリリ様は、生き物オタクなのだ。しかも温かくないやつ。ちなみに虫もOK。

お屋敷の林は、お嬢様の一番のお気に入りの遊び場であるが、小さい時からそこで虫や「枯葉の下の生き物」たちと戯れるうちに、それが堪らなく好きになったという。

だから今でも「冷たい生き物」に、特別な思い入れがありと言われる。そこでハツとする私。

「じ、じゃあ、こちらのガラスケースは?!」

「足が有ったり、無かったりする爬虫類くんたちとか、『金魚の餌にされそうな』子たち……」
目を泳がせるリリ様。

私はバツとガラスケースから飛びのき、距離を置いた。

「盛山さん、帰りました」

「お帰りなさいませ。で、お嬢様は?」

「まあ、…… つつがなくなっていました」

「そうですか、それにしてもねえ」

都心を少し離れた閑静な住宅街の外れに、ここハープスト家（日本名、秋山家）の屋敷はある。

かつてここにはカール様と雪子奥様、リリ様、そして家の中のこ

とを取り仕切る、使用人である私の父母と弟、様々な会社関係の仕事から雑務までオールマイティーにしてくれる、そして従業員の盛山さんとその一家計4人と、賑やかな生活をしていた。

しかし、カール様が亡くなられ、続いて雪子様も後を追う様に逝ってしまわれ、この屋敷の雰囲気も全く変わってしまった。

お二人が天に帰られた後、私の両親は家督を継がれたゾマー様の意向もあり、リリ様のために私だけを置いて帰国。また盛山さんのところの二人の息子も数年前には独立し、最近はリリ様を含めて4人で生活をしていた。

ただし、リリ様は週末以外は別荘で暮らしていて、そこから学校には通っておられるのだが……。

カール様も雪子様も、あまり派手なことはお好きでなかったのですが、屋敷といってもそう華美なものではないが、とても品の良い和風の屋敷であった。ただその屋敷は、都心にしては相当広い、「森」と言ってもいいほど広い、雑木林の中にあった。

その林はリリ様のお気に入り遊び場で、外では立派なお嬢様として振舞われても、このお屋敷の林では、全く持ってあきれるほどの悪戯なお転婆娘だった。

リリ様の戸籍での名前は「百合恵」だ。しかしカール様はいつもドイツ語で「百合」にあたる「リリ」と呼んでおられた。それから、この家の者は皆、百合恵様ではなくリリ様と呼んでいるのだ。ご本人もお父様を懐かしく感じられるのか、好んでその名をお用いになる。

また、この「リリ」というお名前から、「リリ・フォン・ハープスト」というお名前が良く使われる。ただ、この名に関しては、色々事情があり、正式な名前ではないのだが……。

雪子様はリリ様が幼い頃から、大変厳しくお育てになった。恐怖を与える厳しさではなく、自分で生きる力をつけさせるための厳しさだった。

自分で生活する能力、人と心を通わせる力、そして何よりも皆を思いやる優しい気持ち。静かではあるが妥協を許さない雪子様のお姿に、私もだが盛山夫妻もいつも身が引き締まる思いがしていた。

奥様、もしかしたら、いつかはこうなることを考えておられたのだろうか……

つい一か月ほど前の夕方のはことは、今でもショックと共に思い出す。

ある週末、いつもより大分遅く、一人で住んでおられる別荘から帰ってこられたリリ様のお姿に、一瞬、凍りついた。それはカール様からいただいた、美しい黄金のロングヘアは無残にも刈られ、しかも、その御髪の色は、真っ黒になっていたのだから。

そういえばその前、先月からずっと、最近にはなかったほど、酷く落ち込んでおられた。

もしかしたら、その辛い出来事のため、勢いであんな突飛なことをされたのか？などとも考えた。

しかしお嬢様は、その黒髪がブロンドに戻らないよう、こまめに手入れをしされた。それを考えると、一時期の思いつきでなされたというのは当てはまらない。

…… 分からない

最近のリリ様については、そういうしかないのが現状なのだ。

私はリリ様がこの家を出て行かれてから、仕事のことは盛山さん、家の中のことは私が仕切っている。しかし、皆一様に落ち着きがなく、早く本来の主が帰還されることを、心待ちにしている。

ただ盛山さんは、リリ様の沈着冷静、考えなしでは何もなさらない方、今回のことも、お嬢様なりに何か考えてのことに違いないと言っていた。だから、なかなか帰ってこられないかもしれないとも……。

まあ今は、盛山さんのようにリリ様を信頼し、お待ちするしかないだろう。

「さ、勉強を始めましょう」

突然のアンナの来訪に少し時間がとられたけれど、それはそれ、とても楽しい時間が過ごせて、良かったなと思うリリであった。

アンナが心配するように、確かに知らない土地での新しい生活に、不安がないと言えばウソである。大変じゃないわけではない。しかし、この生活を選び取ったのは、考え抜いた末の結論だった。

そして、最後の後押しをしてくれたのが、毎朝出会っていたあの青年、そう、センター試験の時、あんなに親切にしてくれた、あの人……。

あの人が道を掃いている姿、ひと掃きひと掃き丁寧に落ち葉を掃

いていく姿、そしてゴミと目されてしまう小さな命にもちゃんと気づいて、ちゃんと守ることのできる心優しさ。

そして不思議なのは、彼のすることなすこと、どこかで見たような、そして、凄く身近な感覚、さらに何とも言えない懐かしさ感じるのだった。

わたしは、あの人とちゃんとお話をしてみたい。

あの人の生活している世界に、わたしも住んでみたい……

いつの間にか、そんな夢を抱くようになっていた。

でも、そんな淡い夢は、あの朝で終わっと思った。

不幸にもその人に自転車をぶつけてしまったあの朝……。結局そのこと以来、わたしはあの道を通らなくなった。

わたしを見て怯える彼の顔を見てしまった。あんなに怯えた目で見られると、いくらわたしでも凹んでしまう。しばらくはココロにぽっかりと穴が開いたようで、何も手につかなかった。

だけど悶々としているうちにも、一つ素晴らしいアイデアを思い付いた。そして、まだ諦めてしまうのは早い、自分にできることがあるのだということに気付いたのだ。

それは、ちゃんと日本人らしい恰好をして、あの人と再会を果たすこと。もしそうするならば、あわよくば、小さな願いの一部、……ちゃんとお話すること……なら、叶えられるのではないかということだった。

そして、まさかのまさか、わたしはセンター試験の時、図らずも出会い、会話することができたのだ。

あの時あの人は、変な顔をしておられたけど、それでもちゃんと

話して下さったし、送っても下さった。

きつとこのお陰ねと、短くなつた髪を触つてみる。ちなみに、短くしたのは、これから染め続けるにあたって、費用面を考えたからである。りりという女の子は、そういう娘なのだ。

彼女は、兎に角、第一段階は成功したと思つた。本人に会つてみて、ぶつかった時のように怯えられることはなかったのだから。それに、一応会話もできた。で、何よりも収穫だったのは、どの大学に通っているのか、はつきり分かったこと。

「よし、がんばろ」

こんなに偶然が重なるなんて、神様が味方してくれてる。そんな風にも思えた。

自分の置かれた立場から考え、また実際に耳に入ってくる話からすると、自分は、いつかはハープストの家から出なければいけない人間だと思つてきた。

そして名も知らぬ一人の青年への思いが切つ掛けとなり、ついにこのような実際の行動に出た。

実年齢とは不相応に世間というものを知っているに彼女には、今、そのココロの隅で淡く夢見ていることが現実になるなど、百に一つ、有るかないかと思えた。

でも、それで良い。

例え上手くいきつこない、子供の企みなのだとしても、今のわたしが出来る限りのことにチャレンジしてるんだから……。

それに今回こそは、本当にうまくいくかもしれない。この企て、全て自分が責任をかぶるために、敢えて誰にも相談せずに進めてき

けど、一人でやっている割には、ここまでことのほか上手くいつて
いる。

そして彼女は小さく微笑んだ。

第1章 5

冬も一番寒い時期が終わり、ことあるごとに、春の兆しを感じる季節になった。

季節が移り変わる中、俺の学生生活も大きく変わりつつある。

あれだけテンパッて準備していた卒論発表会であるが、何をやっているのか、さっぱり分からないままだが、一応無事終えた。そして今度は、引き継ぎのシーズンを迎えている。

俺も来年度からは卒論生なわけで、当然、先輩からの引き継ぎを受ける。今までの教室に通う学生生活から、いよいよ、研究室が中心の生活にシフトしていくことになる。

新しい環境に、少なからず緊張する俺。

小学校以来、一方的に聞かされる「授業」というものについては、慣れ親しんできたわけだが、「研究」などいうものは、夏休みの宿題ぐらいでしかやっていない。そしてそれも、お座成りで親任せだったりするわけだから、研究ということが、全く分かっていないというのが一番現状に近い表現だろう。

果たして、研究室に入ると、その現実が突きつけられることになった。本当に何もかにもチンプンカンプン。こんなに「お手上げ感」に包まれたのは、いつが最後だっただろうか。その記憶に行き着くには、赤ん坊のころの記憶まで遡らなければならないかと思った。確かに講義で聞いたような話も、チラチラとは聞こえてくる。でも、それが分かっているくらいでは、褒められることなんか絶対無い。分かって当然という感じ。

更にその部屋の専門というのがあって、当然、今迄みたいな一般的な知識、さらには講義で勉強した内容なんかより、ずっと突っ込

んだものであり、ただただ、毎日のように、自分の無力に愕然とすることからスタートすることになった。

で、どうするかというと、全部、教えてもらうしかない。どんな研究をしているのか、どういう手法でしているのか、使う機器、用いている考え方……、というところから始まり、薬品置き場、管理、逐一教えてもらう。

更に実験、観察などというものは、時間ごとに綺麗に区切られ、タイムテーブルに乗っかっているものではない。

結果、めちゃくちゃな時間に、色々とやらざるを得なくなることもしょくないのだ。だから研究室によつては、ベッドとかもしいたらえてあり、時として寝泊りすることすらするらしい。言ふなれば、研究室は一つの生活の場となるわけである。

だから引き継ぎには、研究についてのものだけではなく、研究室での生活のルールみたいなのもあつて、それもマスターしなければならなかったりするのだ。

初めはどうにかなると考えていた俺も、連れまわされているうちに、その大変さに辟易としてくる。

そんなわけで、聞いておかねければならないことは、無数といつても良いほどあるわけで、2月の終わりになつても、なかなか終わらない。

俺に教えてくれてる先輩は、3月には就職先の町に引越すそうで、卒論生の中で俺だけは、入試の二次試験が終わった夕方、学校に行かなければなくなつてしまった。

先輩と約束した時間を目指し、俺は自転車で学校に向かった。

…… 最近、いつも背中丸めている感じがする。

あの事件以来、しばらく背中を丸めて生きていた俺も、この頃やつとまっすぐ歩けるようになってきたのに、引き継ぎに手間取るう

ちに、またクルツとまるまって、下を向いた生活になってしまっている。

沈んだ気持ちで自転車を走らせていると、頬を撫でていく春の温い風にオツと思う。

ああ、すっかり春なんだなあ……。

最近花粉症が流行って、すっかりネガティブなイメージになった春だが、花粉症を発症していない俺は、結構春は好きな季節である。そう、この生暖かい風に吹かれると、色々と切ない想いとか、ワクワクする想いとか色々湧いてくる。そういうちよつとキュンとくるのが、何か良い。

俺は毎日のように走るこの通学路、走りなれた商店街を抜け、バス通りに出、そこから一本脇道に入ってしばらく行くと、もう学校は目と鼻の先。

行き交う人の波、和気藹々としたこの街の雰囲気、俺はとても素敵だと思っている。元気な八百屋のおっちゃんの声聞き、勢いのある魚屋のおばちゃんの声にビクビクしているうちに、さっきよりちよつと元気が出たかもと思った。

こうしていつも通り学校に近づいていくと、果たして、明らかに受験生であろう学生服や、ブレザーなどをきた人たちとすれ違い始める。

（今日、二次試験を受けた受験生達だ。）

そして、この中から何人かは、来年後輩として、うちの大学に入ってくる人たちなのだと思うと、試験だけ受けて、どうか他の大学を受験するセンター試験の時と人たちより、少し親しみに似たような気持ちになった。

そして思い出すのは、あの風変りの女の子のことである。

夕闇の迫る中、良く顔はわからなかったけれど、シルエットからするなら、すらっとした出で立ち、街灯や車の明かりでチラと垣間見たそのルックスは、決して悪いほうではなかった。

（まあ、リアクションに関しては、イタさ全開ではあったが……）

あの娘は、どこの大学に行ったんだろうか？　もしかしたら、ものすごく頭の良い娘で、凄い大学とかに行ったのかも。

そうだ、頭の良い人というのは、ちょっと風変わりのところが有ったりするから、きつとそうに違いない。

そう思うと、なぜかちょっとしんみりとなってしまう自分であった。

そうこうしているうちに、俺は学校のすぐ近くにまでやってきていた。例のごとく、広い道路を横断する交差点で、信号に引っかかる。

この信号、待たずに渡れたことなんか、丸三年の間で、片手の数ぐらいしかない。今日もいつものように、見事に赤信号に引っかった。

そう、この交差点、この信号に引っかかっていたとき、例の「セインター試験彼女」が声をかけてきた。

……　その信号のついている鉄柱のわきのところだったよな

と、おもむろにそちらを向くと、ちょうど今日も、同じ辺りに受験生らしき女の子が立っていた。

スラッとし出で立ち、ニーソックスにミニスカート。キチツと米寿のブレザーと園児のネクタイ。とても上品そうな雰囲気だった。そして特に目についたのは、雪のように白い肌。なんか凄いスタイ

ルの良い娘だなあと思って、改めて顔を見ると、そこで目に入るシ
ョートカットの真っ黒な髪。

?????

なんだか、既視感が……

おや、その娘も、こっちを見て目を瞬かせているみたいだ。

あれ？

いた……

「ああー！！」

俺が声を上げるより先に、あっちが気付いていたようで声を上げた。まさしく「センター試験で声を掛けてきた女の子」が、ビックリして叫んでいた。

「マジかよー！！」

のけぞらんばかりに驚く俺の様子に、信号待ちをしていた人たちが、何事かと俺らを見比べる。俺は前回にもまして、目立ってしまったという事実には、無性に恥ずかしくなってしまった。

「き、き、奇遇ですね」

好奇の眼差しを掻い潜りながら、俺がちよつとぶつきら棒に言つと、

「そうですね、本当に……奇遇ですね」

とちよつと目を泳がせながら、でも、嬉しそうな声色で答えが返ってきた。しかし、何でここにこの娘がいる。あ、そうか

「あの、誰か待っていたんじゃない」

俺の見た様子だと、信号待ちをしていたというより、鉄柱の側にずつと立っていたような感じだった。

何でもないところに突っ立っていたら、一番考え易いのが、誰かと待ち合わせをしているということになると思っただからだ。

「え？ …… い、いいえ、そ、そういうわけじゃ」

何故かちよつとびっくりした顔をして言い淀む。

そこまで話した頃には、それでなくつても短い青信号は点滅し、赤に変わってしまった。それにシマツタみたいな顔をする俺に、彼女はいかにも済まなさそうに視線を下げた。

突っ立って手を体の前で合わせ、ショボンと肩を落とす姿は、ちよつと反則なほど可愛かった。

見た目や話しぶりは、逆に年上にすら見えなくもないほど、洗練されたものを感じる。それがこの少女的なショボンとは！ ギャツプ感にマジ萌えしまった俺。

女性というものに全く関わりがない人生を、黙々と歩んできた俺に、こういうものに対する耐性など、期待するのは愚か者の執行である。そうだその通りだ、この時俺は、完全にこの娘の手中に落ちてしまったのだった。

「あのう、自己紹介が遅くなってしまいました、わたくし、秋山百合恵と申します」

（え？……わたくし？ 申します？？）

いきなり、フルネームを名乗られて、俺はドギマギする。それも妙な言い回しに目をパチクリしてしまったが、その用語が妙に似合っていると感じたのは不思議だった。

彼女は自分の名前を名乗り終わると、ニコニコしながらこっちを見て立っている。

俺はその眼差しに完全にロックオンされてしまった。こうなったら、どんなにロールしようが、アフターバーナーを焚こうが、逃げられはなさそうだと、無駄な事を頭の中で言った。

「あ、はい、俺、雨山秋介、と言います」

「雨山先輩ですか。山が同じですね！」

そして嬉しそうな顔。笑顔が可愛くってまた萌えてしまうが、苗字が一時同じなだけで、何で喜ぶのか分からない。また、彼女のイタサ度が一つ上がったと思った。

「多分、来月から、この学校に来れるはずです」

「多分、……来れるはず？」

ちよつと不思議そうな顔をする俺に、ニコニコと笑顔で答えるには、
「今しがた、試験終わったばかりですから」

「あ、そうだね、確かに……」

分かりきった話だった。俺はちよつと恥ずかしくなって、頭をかいた。俺はそんなドンくさをカバーすべく、ちよつとでも洒落が効いたことが言いたくなり、口走ってしまったのだ。

「じゃあ、『お待ちしています』というべきかな？」

「えー、待っていて下さる？！」

そ、そんな、わたし、どうしよう、と、彼女、勝手にツボにはまっている。赤くなつて、見るからに狼狽え始めた。

しかし、何をどう思ったのか、彼女は影でヨシ！と気合を入れると、こっちに振り向いて、じつと俺のこを見つめた。

俺は何が始まるのかと、今度はこっちが狼狽え始めたところで、

その娘は言った。

「では、合格しましたら、報告に上がります。どちらに連絡させて
いただいたら？」

……れ、連絡？？　そ、そうか。じゃあということで携帯を取り出し、電話番号を伝えようとする。彼女も急いでポケットから出したものは、なぜか黒くってしつかりした、ビジネス用みたいなスマホだった。

あまりにもその娘に似合わないアイテムに、微妙にビビったり、ひいたりしていると、彼女はそんな俺に気付くか気づかないか、頬を赤らめ、じゃあお願いしますと、手早くアプリを立ち上げ、アドレス交換の用意を始めるのだった。

「あ、これで良いみたいです。」

「ん、だね」

「ありがとうございます」

「いや、これぐらい」

かくしてお互い、電話番号を無事交換。彼女は俺のアドレスをゲットして、なぜかホッとした顔をする彼女であった。

こうしているうちに、反対側の信号が黄色になる。もう直、こっちが青になるということで、俺はその娘に別れを告げる。

「では、また連絡差し上げます。きつと」

そういった彼女の視線には、何か熱いものを感じる俺。やっぱ、この娘、何考えているかわかんない……。

俺は首を傾げながら、自転車にまたがり、青信号が点滅し始めたので、挨拶もそこそこに信号を渡るのだった。

（しかし、一体なんだったんだ）

それまで勢いで押されまくっていた俺。ほとんど彼女の言いなりに事を進めてしまった。しかし別れた後、冷静になつてくると、やっぱりおかしいことばかりではないか。いや、そもそも、会ったのはたった二回きりなのに、あの打ち解けた感じは、どうなっているのか。

俺はその後も、夢を見ていたようなふわふわとした感覚が付きまとつた。どうしても、今しがた展開されたことが、現実のものとは思えない。

しかし、彼女はセンター試験の時、俺が思った以上に、魅力的な女の子だった。整ったルックス、モデルみたいなスタイル、さらにその明るい笑顔に当てられて、何だか病気になるってしまったような気すらする。

俺は遅くなってしまったと、ごちゃごちゃに並べてある自転車置き場に、急いで自転車を突っ込み、研究棟の玄関に向かった。

しかし自転車を置き、その玄関の階段を、一段上った時、俺の脚はハタと立ち止まった。

……いや待て、もしあの娘が質の悪いストーカーだったらどうする。

余りに話が出来すぎると、微妙に引つかかっていたのが、それに気づいた途端に、スコンと納得できてしまった。生まれてこのかた、モテたことなど全くなく、彼女がいた試しもない俺。それなのに、いきなりあんな積極的なアプローチをかけられるって、それしかないじゃんか。

いやまさか、あんな屈託なく、明るい表情で……、それに、名前教えてくれたし。

待てよ、名前だって、本名だという保証はない。しかも、あの妙にプロ仕様だったスマホは、やっぱりおかしい……

毎朝、街路掃除で訓練された、落ち葉やミミズ、ケラやアリという、小さな虫たちの気持ちを察するのは、大分、身に着いたような気はしている。

しかし、二十年近く人間やってても、人の心、分けても女心などという摩訶不思議で得体の知れないものを、俺が今まで、一度でもまともに察し得たことがあったのか？

これって、マジ、ヤバいんじゃない？！

気が付いたら、嫌な汗が額から流れていた。

第1章 6

街角での不思議な女の子との思わぬ再会。勢いで教えてしまった電話番号。

しかし今になって我に返り、ことの重大さに、半ばパニック状態に陥ってしまった俺がいる。

研究室に着いてからも、ポケットの携帯が気になってならない。自分のしでかした、軽薄な行動が、時が経つにつれて、ズシンと重くのしかかってくるのだ。

なんで、素性もわからない、いや、むしろ思いつき怪しい人間に、どうしてこうも簡単に、個人情報を出してしまったのか。

一言で言えば、女の子に耐性がないという弱みを、完全に突かれたということなのだろう。そう思うと、余計に無性に情けなく、悔しい……。

そして続いて襲ってくるのは、生来のネガティブ思考によるところの、最悪の事態の妄想だった。

（きつと、俺の電話番号は、怖い人たちに流れ、じゃんじゃん変な電話がかかってきて、もしかしたら、身に覚えのない多額の請求が来て、恐ろしい顔をした人が、それを取り立てに来て、貧乏で金が払えない俺は、気がついたら、海に……）

い、いや、流石に、ま、まさか

しかし、ふと気づくと、微妙に足がガクガクしてたりして。

「おい、どうした？」

引き継ぎをしてくれている遠田先輩は、気もそぞろな俺姿を見て、コイツどうしたんだと訝しがっている。

「あつ、いや、な、何でもないっす。すみません……」

考え事してるところにいきなり突っ込まれ、思わずキョドってしまふ俺。

「おい、ちゃんと聞いてろよ。やる気、有る？」

「はい、もちろんです！」

俺は何度も頷いて、やる気ありますとアピールする。

「じゃあ」

田舎の大学と言っても、やはり研究機関なのだ、高価で複雑でデリケートな機器があちこちに有る。本当に難しい機器は、先生や院生の先輩がやってくれるが、日頃良く使うレベルののになると、全部自分でしなければならぬのだ。

ズブの素人である「卒論生見習い」の俺は、ここはしっかり聞いておかなければ、たちまち困ることになる。

だが、理性ではそう良く分かっていて、どうにかせねばと思っ
いても、胸いっぱいに広がった戸惑いと不安は、強制的に思索の渦に引き込んでいくのだ。

やっぱり気がついたら、さっきのことを考えて唸っている俺。

「それでこれ使った時はな、ここに『使用記録簿』が置いてあるから、これに時間と……、って、聞いているか？」

「そうだ！ なーんだー!!」

気がついたら、俺はポンと手叩いて、先輩を前にして、一人、大声をあげていた。

「……なに、おまえ？」

「へ?!」

はっと見ると、数歩後ずさった先輩。なんかものすごく「イタイ」人間と遭遇した顔をしてるんだがって、……俺か。

でも、その時の俺は、引き継どころではなかった。良いアイデアが浮かんだのだ。

そうなんだよ、電話番号変えたら良いんだ!!「バツカじゃねーの、簡単なことじゃんか」と独り言ちながら、胸をなで下ろす俺。

ハッとして見回すと部屋に先輩はおらず、よく見るとドアの隙間から、何か恐ろしい怪物の様子を伺っているかのように、こっちを見ていた。

「あ、先輩、すみません……」

「……」

「あのう、引継ぎは」

怯えた顔のまま、どうしても入ってこようとしない先輩。仕様がないので、そのまま、引継ぎを続けることになった。

俺はどうしても警戒を解かない先輩を相手に、極めて効率の悪い作業を延々と行い、終わって帰る頃には、開いている店はコンビニと牛丼屋ぐらいしかない時間帯になっていた。

まあ、一事はどうなるかと思ったけれど、あっさり問題が解決した俺の心は、概して軽かった。

俺の電話番号を知っている奴なんて、家族と同じ学科の人間数人と、サークルの連中だけ。変更を知らせることも、大したことではない。

なんだか、ちょっとでもパニくつたのが、もったいなかったすら思う。

さあ、明日になったら、とっとと番号変えてしまおう……

と思っただけど……な。

牛井屋によつて遅い夕飯を終え、家に帰りつき、ドガッとベッドの上に寝転ぶと、一つ深呼吸をして体重を意識的にベッドに託していく。

（疲れたなあ）

解決はしたとはいえ、あんなにパニくると、気疲れなのか疲労感が体の中から染み出してくるような感覚がある。

もう動きたくない、このまま寝ようか、と、怠慢なことを考え出した時、不意にあの娘の笑顔が脳裏に浮かんだ。

手を伸ばしベッドの横の机の携帯を取り、カチャッと開いてアドレス帳を表示した。

「秋山百合恵」

俺のアドレス帳の中で、極めてレアな女の子の名前。

俺はなぜか、それを見詰めながら、何度もため息をついていた。

（携帯番号変えたら、もう、彼女からの電話は掛かってこないんだよな。）

そしてそれだけではなく、そうしてしまったなら、俺があの娘のことを、決定的に拒絶したということになる。

本当にそれでも良いのか？

あの娘を、そんなふうに拒絶しても良いのか？

本当にあの子は、俺を騙して陥れるために、あんなことをしたのか？

少女のような屈託のない笑顔をしていた。あんなに心から嬉しそうな顔をして笑う女の子を、俺は他に知らない。まあ、女の子が俺に微笑むなど、絶対数が少なくはあるが。

いやしかし、もし全部俺の思い違いで、実はとても良い娘だったら、俺が電話番号変えて、連絡できなくなしたら、それはものすごく酷い仕打ちをしたことになりはしないか？

「番号変えるの、いつでも出来るんなら、ちょっと待ってみようかな……」

アドレス帳の彼女の名前を眺めながら、そう呟いた。

結局、それから、次の日も、その次の日も、秋山百合恵から電話

が来ることはなかった。

こう全く連絡がないと、それはそれで、色々考え始める。

で、きつとあの電話番号交換は、あくまでもご挨拶程度の意味で、多くある男友達の一人に加わったぐらいの意味しか、なかったのだとの結論に至った。

（まあ、ルックスに関しては、かなりレベル高い娘だったからなあ。こんなにテンパってる俺の方が、どこまでもイタイってことなんだろう。）

そして、気がついたら、いつもあの娘のことを考えてしまう自分に、盛大にため息を付く。

結局、それからも全く音沙汰なく、10日も経ったところには、半分そんなやり取りがあつたこと自体を忘れかけていた。そして、今まで通りの生活に戻っていくはずだった。

しかし、11日目の朝のことである……。

ウィー、ウィー、ウィー

「あれ、何だろ」

週明け、まさに学校にいくと靴を履いたとき、デフォルトの電話呼び出し音が鳴った。ポケットから携帯を引っ張り出し、ディスプレイを見たら「秋山百合恵」と表示が出ていた。

俺はビクツとし、一つ生唾を飲んだ。

……と、とうとう来たのか？

半分忘却の彼方に去りかけていた彼女からのいきなり電話。もう電話は来ないだろうとタカを括っていた上、学校に遅れると気が急いでいる今の状態。驚きと焦りで、半ばパニックっている自分。

（拒否るか？）

そんな言葉が頭をよぎった。

その時、また、あの笑顔がふわっと脳裏に蘇る。

（いや、俺は「待っている」と一応だが、確かに言っただけな。それにあの笑顔、どういう意味だったんだろう。）

あれから何度も俺の脳裏に蘇ってきては、俺の心を揺さぶるあの笑顔の正体。もし知ることが出来るなら知りたいと思っている俺がいた。

俺は受信のボタンを押した。

「あ、もしもし、秋山です！」

「あ、はい……」

ハイテンションの女の子の声が、耳に飛び込んできた。俺は至って冷静な隙のない声で答えた。あっちの声が不安な色を帯び、もう一度、念を押すように言った。

「あ、あのう、この間、お話しした……秋山……です……けど」

「はい」

キョドっているのを隠したくって、俺はありったけの素っ気なさをもって応える。

「……お忙しいところ、申し訳ありません」

「いえ、大丈夫です」

受話器の音が、明らかにトーンダウンしたのが分かった。俺はあれ？と思ったが、そのまま続けた。

「大学、合格、しました」

「そう、それはおめでとうございます」

「はい、……ありがとうございます」

そして、沈黙。

「……それでは」

「あ、はい」

プツン……

切れた。

なんだか、とってもガツカリした感じが電話口から伝わってきた。もしも、彼女に下心があったなら、ここできつと、もっと気が効いた言い方するんじゃないのか。しかもこんなにアツサリ切ってしまうなんて、普通の営業電話ですら、まだまだ粘るに違いないのに。

「やっぱ、俺の描いたシナリオは、完全な妄想だったのか……」

俺は苛立ちと自責の念のこもった声で、自分に詰問するように独り言ちた。

営業でも勧誘でもない、じゃあストーカーだったとしたらどうか。相手の気持を考えずにつきまとうような奴だったら、人の気持ちを踏みつけるような、一方的な物言いをするはずじゃないだろうか。でもあの娘は、約束した通りの合格の報告だけだった。

電話番号交換したときの、いかにも嬉しそうにしていた彼女の笑顔が、またもや脳裏に浮ぶ。

俺は着信履歴の画面をジッと眺めていた。

さっきの電話もう怒ってしまつて、それこそ電話に出てくれもしないかもしれない。もし、単なる挨拶だけのつもりだったら、これつきりでやめれば良い。

でももし、あの笑顔が心からのものだったら、俺は今、間違いないあの子を傷つける行為をしたことになる。

やっぱ俺、あの娘には、笑っていて欲しい……。

それは正直な、俺の気持ちだった。

携帯を持ち直し、秋山さんの着信履歴を選択し、発信ボタンを押した。

トゥルルル、トゥルルル……

「あ、はい」

ちよつと戸惑つた声が、聞こえてくる。

「秋山さん……、でしょうか？ 雨山です。」

「あ、はい……」

「あ、あの、さっきの電話」

「はい」

「さっきの電話だけど、ちよつと失礼な受け応えして、悪かつたなと思つて」

「え？」

「ごめんなさい」

何だか、彼女が目を瞬かせているのが、目に見えるようだった。

「あ、いいえ、こちらこそ、いきなり電話しまして、失礼致しました。お忙しかつたんでしょう？」

いや、特にそういう訳ではと、言葉を濁す俺。

しかし彼女、やたら言葉が丁寧なんだが、これって嫌味？ それ

とも怒ってる?? まあそれでも仕様がな。こつちの態度がそうさせてるに違いないのだから。仕様が無いので、こつちも丁寧な言葉遣いで応じる。

「ところで、合格された学部はどちらですか?」

「文学部です、国文学をしようかと……」

ちよつと意外だった。日本人離れした、堀が深く目の大きな顔立ちのはっきりした顔立ちで、スタイルも欧米系だったからだ。

しかし、ほとんど知らない人の進路に、どうこう言うなんて、全く要らぬお世話なので、さつさと切り上げる。

「で、折角なので、もし何か手伝えることがあつたらおつしやつてください。出来ることならさせていただきますから。まあ、余り期待され過ぎてても何ですが」

「あ、はい。ありがとうございます」

素直に喜んでいる声。彼女、俺に警戒心皆無なんだけど、なんで?

「ところで先輩は、何学部なんですか?」

「え? ああ、僕は理学部です」

「やつぱり! で、生物学科でしょう?」

「いえ、どうして? 化学系です……けど」

「あれ? そうなんですか?!」

ちよつと意外そうな声。挨拶程度の知り合いなのに、そこでどうしてそう決めつけ驚くのかと、ちよつと首を傾げたくなる。

でも、こう会話をしているうちに、初めの硬さは取れていき、自然な感じになってきた。でも、一番不思議なのは、俺自身の方だ。

普通、女の子を前にしたら、硬くなって無口になる俺が、この娘が相手だと、ポロポロと言葉が出てくる。

「結構、生き物は好きなんですけど、生き物、飼うのは良くつても、生き物調べたり、生き物で実験するの、ちよつと苦手なんです」

「なるほど、本当にそうですね!」

すごく納得した! みたいなトーン。

でもどうして、こんなに嬉しそうに会話にのってきてくれるのだろ。いつもじゃ絶対無いことに微妙に戸惑いつつも、今まで感じたことのない、温かい気持ち胸に広がっていく。

色々とよく分かんないところがある娘だけど、決して悪い子ではない。

それがこの朝行き着いた、俺の結論だった。

第1章 7

その日も、何かお手伝いをしようと、リリ様のアパートにやって来た。

もう何回か来ているので、大分ここに通うのも慣れてきて、初め来たときみたいな驚きや違和感というものを、あまり感じなくなってきた。

部屋の中に通されると、畳表からの香りに出迎えられる。お嬢様が来られたとき変えられたものらしく、まだ青々とした畳。まるで野原に佇んでいるような気分になさてくれる。

手前の部屋には座敷用のテーブルがあり、そこにはPCと色々な書類が置いてあった。画面には英文が映しだされていた。海外の二ユースサイトの様だった。

「ちょっと、情報収集中」

PCを覗く私に、ちょっと照れておられるような顔をしそう言われると、リリ様は、まあ座つてと座布団を差し出された。

「お仕事、お疲れ様です」

「お屋敷、出てきたと入っても、皆さんにご迷惑はお掛けできませんからね」

ここで言われている「皆さん」と言われているのは、もちろんお屋敷のハープスト家のに住んでいる「皆さん」であるけれど、それと同時に、世界中で知られている、ハープスト・グループという投機グループのメンバーの「皆さん」という意味も含まれている。

簡単に言ってしまうと、私を含めハープスト家にいる使用人一同、ただ毎日、お屋敷の掃除だけをしているのではなく、本業である投資活動のお手伝いをするスタッフなのである。

ここで明かさなければならぬ事実がある。それはリリ様は聖パウラ学園所属の一高校生という顔と同時に、もうひとつ、秘密の顔を持っておられるということ。

それは、天才的個人投資家という顔である。

カール様は、いよいよご病状が深刻になってきたのを感じられて、ご自身の亡き後、ご家族をはじめ一切のものを、部下である盛山さんに任せられた。

そんなに自分に信頼を寄せられるカール様への盛山さんの入れ込み様は、当時は言うまでもなく、今だに並々ではない。

盛山さんはカール様が亡くなられて以来、お二人に対し、また、奥様が亡くなられてからはリリ様に対し、文字通り誠心誠意、仕えてきたのだ。その律儀さについては、一緒にこれまでやってきた私たち自身が、確信をもって証言することが出来る。

こういういきさつで、盛山さんが中心となって、カール様の莫大な遺産を運用してきたわけだが、今ではそれが、知る者ぞ知る、世界的な投資グループにまでに成長した。

だが、ここまで大成功したのには、秘密があるのだ。

盛山さん自身も、確かに凄腕の投資家ではあるが、それ以上に凄いのが、リリ様ご自身なのである。

それはまさに血と言えるもので、代々、そちらの世界では大いに名を馳せた、ハープスト家の直系であるだけあって、カール様ご健在の頃から、リリ様は相場の読みの正確について、お父様を驚かし ておられた。それは文字通り、天才的としか言い様のないものだ った。

そこでカール様は、ご自身に何か有ったときには、盛山さんとり様とで、資産運用をするようにと遺言されたのは、そのためでも

あつた。

けれども社会通念上、未成年の女の子がそんな大きな取引などに携われるはずもない。だから表の顔は、どこまでも盛山さんが受けもつ。だが内輪では、特に最近の難しい相場展開になつてくると尚更であるが、リリ様がイニシアティブをとって指導される。

「円高、ギリシヤ、中東問題つて、色々難しいわねえ……」

そう困った風におっしゃるリリ様だけれど、もう、すっかり先を読んでおられるのだ。

以前、お嬢様から直接聞いたことがあるが、色々調べて弾きだした結果に加え、いよいよとなると、不思議と感じてしまう、相場のうねりみたいなものに基づいて、判断されるのだという。

……まあ、凡人には想像も出来ない「超能力」

もちろん百発百中とまではいかないけれども、普通ではありえないほど成功される。その証拠に、今まで何度となく、世界が泡を食っているような状況の中、凄いところを売り抜けてこられたのだ。だから、いざとなつたら盛山さんは、リリ様に相談して一切を決めるのだった。

その「読み」の的確さは、株や為替の相場に關してだけではない。人の心もまた普通では考えられないほど、正確に汲み取るのが出来るになるのだ。

単に「人の気持ちを汲むことができる」というには、余りにも正確すぎる。そう一種の「読心術」と言つた方が正しいだろう。

しかしお嬢様の偉いところは、そうして知つた人の心の真実を、めつたなことでは口になさらないこと。更にその情報を、自分が有利になるためではなく、どこまでも相手のために行動される。

学園であそこまでカリスマ的な信頼を勝ち取られたのは、このことを考えると当然なのかもしれない。

ただこの読心術も、実は万能ではないそうなのだ。

というのは、自分に近い人たち、特に感情的に深いきずなで結ばれた人、家族とか親友とかに対しては、全くと言って良い程、機能しないという。

それは、お嬢様がもっておられる、その人への思い入れや願望が遮って、本心が分からなくなってしまうのだそうだ。

私についてもまさにそうらしく、アンナの心は分らないと良くこぼされる。

……まあ、違う方法では誰よりも良く分かるそうではあるが。

「アンナ、放っておいてごめんなさいね、今、取り込んでるの」

「あ、はい、どうぞ、こちらこそ、お忙しいところに」

リリ様はPCの前に行かれて、次々と映し出される英字サイトを、次から次へと読み進まれる。

デスクの上のPCに背筋をまっすぐ伸ばして向かわれる姿は、高貴なお姫様そのままだが、お嬢様が相対しておられるのは、混沌とした世界、奇麗ごとだけでは済まされない、ドロドロとした人間の欲望そのものなのだ。

これも不思議でならないのだが、そんなものに日常的に接しておられながらも、お嬢様の心根は、なぜかいつまでも少女のよう純粋で、無垢であるということ。

……いや、だからこそ、なのか？

世の人々の一つ上を行くお嬢様の振る舞いは、この普通の人では有り得ないほどの、無欲あつてのことなのかもしれない。

まあ、今回、何もかにも捨てて、こんなところに引っ越し、ゼロから始めるという全くの奇行も、お嬢様の物への執着のなさを考え

たら、そう、特別なことではなかったのかもしれない。

ただ引つかかるのは、なぜ今なのか、なぜこんなにいきなりなのか。

そのところは、未だに謎の中に沈んでいる。

私は一つため息をつき、気合を入れ直すと立ち上がった。

（じゃあ、私も始めるかな）

私はいつもここに来たらすることに取り掛かることにした。それは、お嬢様の身の回りの世話一般である。と言っても、お嬢様は高校入ってしばらくしてからずっと、別荘で一人暮らしをしておられ、こつという生活は慣れておられるので、大概の事は自分でされるのだが。

私は「足が無い生き物」や、「足が沢山ある生き物」が入っているという、部屋の真中にドンと置かれているガラスケースを避けて片づけを始めた。

しかし片付けしようと思って、どれどれと調べてみると、先週末の時よりも更に磨き上げられていた。もうボロというよりも、ヴィンテージ的な風格をすら感じさせられるようになっていた。

「お嬢様、かなり頑張られましたね」

「え？ ああ、お掃除のこと？ そうよ、学校が始まってないから、時間があるの」

……お嬢様、やっぱりちよつといつもと違う。

「それに、何だかとても楽しそうですね」

「そ、そう？」

私はお嬢様の返事に、微妙な焦りを感じ取った。

「何か、良い事、あったんでしょう」

「え？」

やっぱり、何か有ったんだ。小さい時からずっと一緒に育ってきたのだ。ちょっとした声の上ずりでも、私にはちゃんと分かる。

でも、お嬢様はPCから目を離されることなく、何やら忙しく、メモを取っておられる。

（どうも、お話になるおつもりはないらしい）

私はまたダンマリかと、小さくため息を付き、口をつぐんだ。

（兎に角、室内には、あまりすることはないようだ）

私はPCをジッと見つめておられるお嬢様の背中に、外、見てきますと断って外に出た。

建物自体は酷いものだが、ロケーションは決して悪くない。とても自然が近く気持ちの良いこのアパート。

私は思いつき深呼吸を試みた。

（お屋敷がある都心では、こんなことなどしたいと思わないが…）

いつになく開放的な気持ちになっている自分に、これはかなりお嬢様に毒されてきたかなと苦笑した。

ふと見ると、階下の自転車置き場に、見慣れた自転車が置いてあった。

（まだ、あの自転車乗っておられるのか）

ハンドルに傷が入り、カゴも微妙に歪んでいるその自転車。

私はあの日、お嬢様が帰ってこられたとき、自転車に転んだような傷がついていて、何事かと驚いた。しかし、自転車以上に私を心配させられたのは、その時のお嬢様自身のご様子だった。

目は泣き腫れて赤くなり、背中を丸めたお嬢様。あんなにお嬢様が小さく見えたことは今まで一度もなかった。

何かひどい目に合われたのかと震撼したが、よく聞いても乱暴されたとかそういうことではないようだった。だが言葉を濁すばかり

で、本当のところは、どうしても教えてくださらなかった。

（そうだ、そしてその直後、いきなり髪を切って黒く染め、カラーコンタクトを入れたのは……。）

このお嬢様のなさった行動から考えて、問題の原因はお嬢様の容姿にあるということが想像できたのだが、誰もが羨んだ、美しい金糸のようなブロンドの髪と、上品な深い青色の瞳。それらののどくに、お嬢様をあんなにまで苦しめる、原因となるものがあるのか……。

これもまた、未だに全く解決されていない疑問である。

私はフツと薄い笑いを浮かべ、困惑している自分に語りかける。
お世話役というのは、主人の身の回りの世話をし、安全を確保するのが仕事なのだ。お嬢様の纏っておられる不思議を解明する探偵ではない。

幼なじみとしては、余り秘密にされると、正直、寂しさを感じないではないが、お嬢様が私のことを、「お世話役」としてみなされて、色々と伏せられることについて、何を言うことが出来よう。
いつもたどり着く答えが出たところで、私は一人考え込むのをお終いにした。

その時、いきなりお嬢様の部屋のドアがバンと開いたと思ったら、外に人影が飛び出してきた……って、お嬢様？！

なんとお嬢様、ジーンズにＴシャツに、カジュアルなジャケットを羽織っておられる。今まで、一度も見たこともない姿だった。

「あ、アンナ、せっかく来てくれたのに、本当にごめんなさい！
ちよつと、わたし出て来ます！ あと、お願いね。帰るの夕方に
なりそう」

「あ、は、はい」

黒髪のショートヘアのリリ様は、口元の淡いピンクのリップ？……
え？ このメイク。

今迄は「お嬢様」という言葉が、誰よりも良く似合う、凜として高貴で近寄りがたい雰囲気を持っておられる方であり、メイクも服装も常にそのようにしておられたのに。

全く少女になってしまっておられた。

「リリ……様」

「ごめんなさいね、本当に……」

「あ、いえ」

そう言われたと思ったら、今度は初々しい笑顔が弾ける

…… 今まで見たこともないほど、何もかにもが可愛らしさ全開。

リリ様は階段を駆け下りられると、例の傷の入った自転車をさつと出してそれに乗り、あつという間に行ってしまった。

私はお嬢様が走り去っていった道を、いつまでも呆然と眺める。

これは私の想像を超えることが起きているようだ。盛山さんに相談しなければ、大変なことになるかもしれない。

私はすぐさま部屋に戻ると、戸締りをしてとるものもとりあえずという感じで、アパートを後にするのだった。

第1章 8

『あ、こんにちは!』

「こんにちは」

耳元に響く、携帯からの秋山さんの声。今日もとても爽やかで明るい。

あの電話以来、時々、秋山さんから電話がかかって来るようになった。

今迄、俺にかかってくる電話と言えば、サークルの仲間とか、同級生とかからの事務的な連絡ばかり。友達との連絡もごく稀にありただだった。だからこんな風に、それ以外の人から、しかも女の子から電話がかかってくると言うのは、俺の人生初かもしれない。

正直、戸惑わないではないが、相手が秋山さんなので、他の女の子と話をすることを考えると、それほどではないかもしれない。

なんせ、話の内容が内容だし……。

彼女はこの春にこの町に引っ越してきたらしく、この町や大学のこと、生活一般から学生生活全体について、色々なことについて質問してきた。

そして、そういう話が終わると、必ずと言って、天気のこととか食べ物のこととか、他愛のないことについての話題を取り上げる。そして最後に必ず出て来る話題が、なぜか生き物系……。

『今日、初めてハエが飛んでいました』

とか、

『モンシロチョウが蛹になる季節ですね』

とか、果ては、

『越してきて、やっとゴキブリ見ました!』

などと嬉々として宣い、見事に俺を絶句させてくれるのだった。

女の子というのは、今、流行っている歌とか、ファッションとか、タレントの話とか、そういう話が好きだと思っていたので、こういう話題を振ってくる秋山さんには、かなりビックリした。

実は生き物全般に対しては、それなりの関心と知識とがある。というか、生き物全般に何とも言えない親しみを感じている。

虫たちの飛び交う野原とか、蝉しぐれの山の中とか、秋の虫の声とかにじつと耳を澄ますのは、俺の一番のリフレッシュ法。そうすると、まるで生き物たちの交し合う「声」が聞こえるような気がする。ああみんな頑張って生きてるなーって不思議な共感を感じる。するとなぜか俺は元気になってくるのだ。

いや、もちろん、こんなことやってるなんて、誰にも話したことはない。

かつて友達に「動物とかと話できると、良いよなあ……」みたいなこと言ったら、おまえ、ロマンティストだなあと、ジロジロ顔を見られて思いつきり冷笑された。

まして、本当にそんなこと出来るような気がするとか言ったなら、きつと二度と口をきいてもらえなくなるだろう。

正直言えば、物心ついた時から、そういう感覚はあったのだが、例の道掃除していた二年間、毎朝、掃いて出会った数知れぬ小さな命たちとの関わりによって、一層強くなったように思う。

錯覚にせよ、生き物たちが呻いているのをどこかで感じていると人間に対してもそんなにドライには生きられない。

冷徹な合理主義、視野の狭い自己保身の雰囲気支配し、それらがぶつかって生じる殺伐とした空気の中で、「隠れウェット」な俺は、どうしても乗り切れない自分をいつも感じる。

そしてそんな中でも、そつなく生きていく勝ち組の人たちを目の

当たりにし、到底そんなことなんかできそうもない自分を突きつけられ、恐れや疎外感、言いようのない負い目を感じる。

……やっぱ、自分で妙な感覚に振り回されてる「ダメ人間」だな。

俺はここまで考えて一つ、大きくため息を付いた。目を上げると、もう日が暮れてきてて、部屋は薄暗くなってきていた。ただ窓だけが白く輝いていて、すべてが逆光でシルエットに見えるのが、なんとも物悲しい。

一日が終わり、また、今日も何の変化もなく過ぎていこうとしている。

俺はこんな毎日を、節操なく過ごし続けて、人生の最後にも同じ気持ちを抱えて、この世を去っていくのだろうか。

（あー、いかん、いかん）

こんなふうに思いつめていたら、いつかおかしくなってしまう。

俺は気分転換を図るため、コーヒーでも飲もうかと立ち上がりかけた。その時、不意に脳裏に声が響いた。

『やっと、ゴキブリを見ました！』

耳にして思わず固まった時の、あの秋山さんの声だった。

まだ女子高校生みたいな娘が、嬉しそうな顔をいてゴキブリの出現を報告するって、なんだそりゃ。

「ゴ、ゴキブリかよ、マジ、ありえない……」

そう口にした瞬間、言いようのない間抜けさに、俺は思わず、ブーっつー!!と吹き出した。

「アハハ、何だよそれって」

俺らしからぬ大声での爆笑。アハハ、アハハと笑ううちに、つい今まで俺の中を支配していた陰鬱な気持ちが吹っ飛んでいた。

あれ？ 今の何？

俺は涙を溜めながら、尚も収まらぬ笑いに身を振りながらも、思わぬ自分の心の変化に、戸惑いすら感じた。でも確かに俺の中で何かが解き放たれて、ふっと自由になっていく。

（秋山さん……、彼女は一体）

出会ったといっても、まだ直接のものは二回だけ。薄暗かったので、正直、顔もはつきり思い出せない。確かに俺にしては、結構な頻度で電話はしているが、素性については全くといって知らないのだ。

でも、あの娘の感性は本当に俺の度肝を抜く。

そして、それがなんとも心地よい。

確かに何も知らないことは確かなわけで、どこまで心を許しているのか、まださっぱりわからない。しかるべき心構えが必要なのは、当然のことだ。

でも、彼女の出現によって、もしかしたら、俺の変わらない毎日に、何かが起こり始めているのかもしれないと、思うのだった。

そうこうしているうちに四月になり、もう数日後に入学式が迫ったある日。またも彼女から電話が来た。

俺は今度はどんな妙なことを言い出すのかと、ちょっとワクワクしながら電話に出た。

しかし、その日の電話は少しいつもと調子が違った。

『おはようございます』

「あ、はい、おはよう………ございます」

なんだか、いつもとは別人のように思い詰めて緊張してた声。固い雰囲気をもとっている。

「………はい、なんでしよう………か？」

『実は、折り入ってお願いがあるのです』

（「お願い」ってなんだ）

その瞬間、2次試験の遣り取りの直後に思いめぐらしていた、秋山さんの「下心」のことが脳裏に浮かんた。そう、親しくなっておいて、何か怪しい物をめちやくちや高価な値段で売りつけるとか、ヤバイものに勧誘するとかということである。俺は急にドキドキしてきて、たまらなく苦く冷たく嫌な思いが、胸を圧迫し始める。

なぜか彼女はそう言ったきり沈黙してしまった。その沈黙も俺の想像を最悪の結論へと押しやっていく。

考えてみたら、良く分からない話をしてでも親しくなり、その勢いで本来の目的を……、ということは、確かに「戦術」としてアリかもしれない。

『こ、こんなこと、お願いして良いのか、分からないのですが』

「あ、………はい」

（やっぱ、来たか！？）

俺の心臓はもう息も苦しいぐらいドクドクと鼓動し、気持ちは一層、絶望的な思いで覆われていった。

『あのう、ホームセンター、大学の近くでどちらにあるか、ご存知ですか？』

「え??？」

彼女が緊張しまくって頼んできた「お願い」は、俺の想像からすると、余りに突飛だった。お陰で一瞬、意味が分からなかった。けれども彼女はそんな空気に関係なく話を続ける。

『あ、あのう、わたし、土が欲しいんです』

「土?!」

『土って、そうです、土です。養分たっぷりの腐葉土です。うちの周りに畑はあるんですけど、畑のを頂く訳にもいきませんし、ちゃんと買えるところがないでしょうか?』

「土……です、……か?」

更に斜め上の話。女の子の必至なお願いが、「土」ですか、そうですか。

（ま、まあ良い。土が欲しい女の子だっているだろう。）

「で、どれぐらい買うんですか?」

『え? 大きな水槽、一杯ぐらいなんです』

「大きな水槽、……一杯」

『はい』

そこでまた重い沈黙。

俺はあまりにも予想とかけ離れた話の流れに、彼女との会話を何度もリプレイしていた。

（だから、水槽があって、それに土を入れる……んだな、プランターじゃなくって）

そしてやつとのことで、土がいっぱい入れられたガラスの水槽が頭に浮かぶ。しかしあれって、どれぐらいの量が入るんだろうか。ペット売り場の水槽とかを考えて、簡単に計算してみる。

（大きいと言っんなら、……相当な量になるよな。少なく見積もっても、10キロより軽いということはありえない、いや、20キロ行くか？）

で、記憶の隅っこにある、秋山さんの姿を何とか引っぱり出して並べてみるも、これは、大変な作業になるだろうとすぐに想像できた。

すると耳元に、ちよつと震える声が聞こえてきた。

『……あ、あのう、それで、お願いなのですが』

「はあ」

『お、お手伝い……お願い、できないでしょうか？』

「え？ 買い物に付き合えってことですか、俺に」

『あわわ、い、いえ、済みません、無茶なお願いでした！』

慌てて撤回しようとする、彼女の声を遮って俺は言った。

「良いですよ、暇ですし」

『え？』

俺もあちらさんも、微妙に声が上ずっている。

『じゃあ、明日、でも、良いですか？』

「はい、良いです。どこで待ち合わせしますか？』

『あ、学校の正門横で良いでしょうか？』

「ええ、そうしましょう」

なんか、成り行きで、会うことになってしまった。

という訳で、俺はこうして、学校の正門に向かって、自転車を走

らせている。

しかし、あの電話の後からここに至るまで、個人的には結構、大変だった。

いくら相手が秋山さんだからと言って、まぎれもない女の子なのだ。女の子と一対一で会うなんて初めてなおれは、どうしたら良いと言うのだ。

何を着ていくのか、どうリードするのか、良く世間では様々な”HOW TO”が紹介され、色々な情報が流れているが、俺はこれまで全く無関係な世界に生きてきたのだ。

しかも、こんなにも何もかにも分からないというのに、この類の相談ができる友達が一人もない。

途方に暮れて、いつそ昔どこかの誰かのしたように、ネットに助けを求めようかと思うも、今迄、そういう風にネットを利用したことがないので、「半年ロムツてる」とか言われるのが落ちだろうと今一つ乗り気になれない。

簡単に請け負ったのはいいけれど、実際は基本的なことが、何もわかっていない俺なのだ。なんだか、ガツクリ来てしまった。

……こんなじゃあ、これつきりってことになりかねない。

俺は必死に悩んでいるうちに、自分がため息交じりにつぶやいた言葉にハツとした。

（おい待て、ちょっと電話で話が弾んだぐらいで、入れこんでしまふ男なんて、最高にイタいぞ。）

いや、それ以上に嫌なことに気が付いた。もし俺が、あの人に特別な思いを持っているなどと、誤解させてしまったらどうだろう。きつと気持ち悪い思いをさせたり、怖いと思わせる。それは、絶対に嫌だった。

そうだ、だからあくまでも下心無し、どこまでも親切でお手伝いに来ました！と、はつきりと示さなきゃならない。

という訳で、俺は「土を買う」というタスクに対して、TPO最重視し、埃もぐれで床に転がっている土の袋を、躊躇なく抱きかかえて運べる服装で向かうことにした。

そしてそれに一番合うのが、体育の授業に使っていた着古したジャージだと思い、ちよつと古めのデザインのジャージで、彼女との待ち合わせ場所に向かっているのだ。

俺のこんな恰好を見て、どういう顔をするか。

彼女は俺を見るなり変な顔して、それから、距離を置いて歩くかも……と、予想してみる。

すると、なぜか胸にズキンと痛みが走る……って、

(おい……頼むから、そういうの止めてくれよ。)

俺は自分の中で、急に頭をもたげだした、妙にセンシティブな「自分」に不平を鳴らした。

俺は「あわゆくば……」みたいな、妙な下心はどこまでも排除し、爽やかで親切な先輩でいたいのだ。

それなのに、こんなグダグダなことしてる様じゃあ、マジで「キモいおにーさん」ってことに、なってしまうじゃないか。

俺は無性にイライラしてきて、一人、眉をひそめる。

約束の15分前に、大学の正門前に着いた。するとその正門横に、人だかりができていた。何で集まっているんだろうと、ちょっと観察してみると、そいつらがある一方にチラチラと視線を向けていることに気付いた。

……え？

その視線の先に、確かどこかで見たことがあるような女の人が立っていた。

服装はジーンズに紺のジャケット。背の高さは俺と同じ位で、黒のショート・カットの髪と雪のように真っ白な肌。ハーフっぽい日本人離れた顔立ち……って。

オイ！

俺が目を瞬かせながらその娘を見ると、その顔にフワッと笑顔が輝いて、すぐにこっちに向いてトコトコと走ってきた。

「あ、先輩！」

「え？……秋山さん」

「ハイ！」

ほんの少し息を切らせて、僕の真ん前にすつくと立つ美女。

そうなのだ、ちょっと固め、それでもって少し暗くて影のあるあの受験生は、キラキラと輝く美女に変貌していた。

第1章 9

「あ、先輩！」

俺は自分に向かつて駆け寄ってくるこの美女が、電話口でしばしば声を聴いていたあの「妙な人」、秋山さんであることを認知するまでには、ゆうに数十秒の時間を要した。

俺に駆け寄ってきた秋山さんは、フリーズして固まっている俺に変な顔一つせず、ニコニコと微笑みかける。

「今日は、本当にありがとうございます」

「あ、いや」

「どうぞ、宜しくお願いします。」

彼女はテレビかどこかで見た貴人のように、優雅に頭を下げた。

「あ、こちらこそ」

（はー、やっぱりタダ者じゃあない？）

いきなり、ビビってしまったている俺。でもそれを悟られるのが嫌で、極力、余裕を装う。

「んじゃ、行きましようか？ えっと、あっちの方です」

「はい！」

そう言われて急いでクルッと振り返った彼女、でもそこでなぜか急に動きを止め、一点をジッと見るのだった。

何だろうとその視線を辿ると、その先には向こうで屯っている、うちの大学の学生であるう男たちの集まりがあった。

「……………どうしたんです？」

「え？」

彼女は呼ばれてハッ振り返ると、慌てて謝った。

「すみません……………」

「いや、謝られても、なんだ、えっと」

でも今度はじつとこっちを見ている。俺はどう反応して良いかわからず、慌てて場を繕った。

「あ、いや、ま、まあ、行こうか」

「あ、はい！ わたし、『先輩』について行きます！」

なぜかそう言った時の彼女、妙に気合が入っていて、ただ「答える」というより、まるで周りに「宣言」するようだった。

俺はいきなりの妙な行動にビクッていると、彼女はそんなことは構いもせず、急いで自分の自転車のところに行った。ふと目を向けると、あの屯している連中が、その彼女の様子を目で追っている。

彼女は準備を整え俺の側に戻ってきた。さっきのやつらのことは気になったが、「ではお願いします」と言うので、じゃあと彼女に先立って走り始めた。

（しかし、今のは何だったんだ）

あの屯していたやつら、秋山さんの知り合いだったのだろうか？などと、色々思いめぐら

すも、これだ！という答えに辿りつはずもない。

それに「先輩について行きます」と言った時の彼女の「宣言」。

あれはどういう事だったんだろう。いちいち不思議なことが尽きない人だと、溜息をつく。

学校からホームセンターへの道は、繁華街を突っ切るので、街中の狭い歩道をずっと行く。前からひっきりなしに来る人や自転車で、気を抜くことが出来ない。

俺はいつの間にか、さっきのことと秋山さんのこともどっかに行ってしまった、運転の方に気を取られてしまっていた。

しばらく行ってハッとして、後ろを振り返った。すると、そこには秋山さんはいなかった。ビックリしてブレーキをかけて急停車し、あたりを見回したら、一つ向こうの信号で彼女は引っかかっていた。

（し、しまった！）

ツーツと冷たい汗な背中に流れた。女の子と連れ立って歩くこと

どころか、友達ともこういう風に移動したことのない俺は、ついてくる人に気を遣うなどということは、全く身についていない。

遠くに小さく見える秋山さんを見つめながら、さすがにこれは、呆れてしまっているに違いないと思った。モテるモテないというレベルではなく、女の子と歩くスキルすらないという現実を突き付けられたようで、むちゃくちゃショックだった。

しばらくすると、キキツと自転車のブレーキの音がした。すぐそばから声。

「先輩……」

「あ、ゴメン……」

なんだか顔を見るのが怖い。でもまず謝らなければと顔を上げた俺の目には、さっき会った時と同じような笑顔が映った。

「先輩、ちよつと早いです」

「あ、済まない」

「あ、いや、そんな」

素直に頭を下げる俺に、彼女は恐縮した。

「わたし、遅くって済みません。自転車運転するの下手で、上手く追いかけれなくて。あのう、……もうちよつとゆっくりで、お願いできますか？」

そういつて、ちよつと上目づかいでお願いする秋山さんだった。

（あれ？ 怒ってないのか？）

しばらく様子を伺っていても、少なくとも俺の目には怒りの「い」の字も、読み取ることではできなかった。

ホツとすると同時に、逆に気を遣わせてしまったなと、自分が情けない。俺は自戒を込めて彼女に言った。

「今度はゆっくり走るから」

「はい、お願いします！」

彼女はクスツと笑いながら、元気に答える。

今度は要所要所で後ろを振り返り、秋山さんにペースを合わせて自転車を走らせた。確かに御世辞にも自転車の運転がうまいとは言えなかった。フラフラするので、対向車とか歩行者が来ると、いちいち泊まっていきすぎるのを待つ。万事この調子だから、俺だと10分ちよつとの道のりが、ゆうに倍は掛かっている。

でも、一生懸命俺に着いて来ようとしていることは、痛いほど伝わってきた。そんな彼女になんかジーンとした俺は、今日はことん彼女のペースに合わせようと心に決めた。

そうこうしているうちに目的地であるホームセンターの大きな看板が見えてきた。俺が振り向いてそれを指さすと、彼女も分かったようで、笑顔で「見えましたと」頷いて見せた。

「へー、ホームセンターって、こういう感じのお店なんですねえ」
エントランスを入り、入り口の案内を見ながら、そんなことを言い出す。

（ホームセンター、来たことないのか、この娘は？）
また彼女の不思議が一つ増えた。でも、かつてほど気にならなくなってきた自分。

きよろきよろ周りを見て回る彼女とともに、店内を見て回っていた俺は、そうだと思って、彼女に提案した。

「あつち、先に行ってみませんか？」

「え？」

土と言うからには、まず園芸コーナーなんだが、その前にどうしても確認しておきたいことがあったのだ。

「どのサイズの水槽ですか？」

「ああ、はい」

俺が行ったのはペットコーナー。実際においてある水槽を見てもらって、一応、サイズを確認したかった。

「この大きさですね」

「はあ……」

秋山さんによると、長辺60センチサイズの水槽のようだった。ざっと見て100リットル。20リットルを五袋か……。

「ちよつと自転車じゃあ無理かもしれませんねえ……」

「え、そ、そうです……ね」

慌てて青くなる秋山さんを、まあまあと宥めておいて、俺はサービスカウンターを探す。すぐに見つけたので、荷物の配達について尋ねてみた。その結果、今日に言うのは無理でも、五袋も買えば、市内は無料で届けてもらえるようだった。

じゃあ、秋山さんに相談してみようと振り返ったら、すぐそこに彼女はいて、心配そうに様子を伺っていた。

「あれ、五袋買ったら、タダで届けてもらえるみたいです」

「え？ あ、そうですか」

ビックリした後、ちよつとホッとした顔をするも、今度はショボンと肩を落としてしまった。俺としては、これで一件落着！となる想定だったんで、あれ？？と思ってしまった。

「何か不都合でも？」

「あ、いえ……何も」

何もないようには、全く見えない秋山さんだった。

支払いを済ませ、届け先をサービスカウンターで届け先を用紙に書き込む。彼女が書き込むのを、何も考えずに後ろから見ていた。

（『菜の花町』か）

どうも、うちの近くのようだ。と思ったところで、女の子の住所を盗み見るという、かなり問題のある行動をしていることにハツとする。俺は少し距離を置いて、あたりに陳列してある、便利グッズなんかを物色していた。

「終わりました！ お待たせしました」

「良かったですね、これでもう心配ない」

俺はどうか任務を完了することが出来てホッとしていると、そこでまた秋山さんは困ったような顔をする。

「どうかしました？」

俺がまたその困った顔の原因は何かと問いただすと、彼女はこう言った。

「あ、あのう、これから、お暇でしょうか？ 良かったらお礼を…」

「はあ」

そう言った秋山さんの真っ白い顔は、見事にピンク色になった。

秋山さんは、今度は自分の後についてきて欲しいと言った。お礼をするために、案内したいところがあるそうだ。

彼女さつきからちよつとテンション高めで、これまでのしつとり落ち着いた秋山さんらしからぬ、微妙にキョドっている風に見えなくもなかった。

それでかなり無理をしたお礼を考えているのかと思い、水を向けてみる。

「あのう、お気遣いなく……」

「いいえ、もう、決めてましたから」

自転車で走り出してから秋山さんは、さつきのはにかんだ雰囲気は失せ、なぜか彼女は決然とした表情で、俺をどこかに連れて行くこうとしている。これはもう従順に従うしかないかと、それ以上どうこう言うのは止めにする。

前を走る秋山さんの後ろ姿は、心なしか嬉しそうに見える。俺が往きにしたように、止まるたびに後ろを振り返っては、俺がついてきているかを確認する。そして俺がいるのを確かめると、彼女は決まってホッとした顔をした。

彼女の後についていくと、商店街を抜け住宅街に入り、それも
う抜けて、田んぼが広がる郊外へと進んでいった。そんな田園風景
の広がる町外れの一角に建つ古いアパート。

どこかの食べ物屋ぐらいにヤマを張っていた俺は、想定外の場所
に案内されて、少なからず戸惑っていた。

「ではこちらに」

自転車置き場に自転車を置くと、秋山さんは映画の中の宮廷のシ
ーンの中で出てきそうな優雅さを持って、俺を案内する。

もしかして……と、俺なりに考えて思い当る解答。

（まさか、自分の家??）

だって、まずこんなボロアパート、あれ、秋山さんお嬢さんじゃ
ないのか？

俺はもう一度秋山さんの後ろ姿を眺めるも、物腰から雰囲気まで、
やはり隙のないお嬢様に見える。

いや待て。それ以前に、まだ知りあつて間もない俺を、こんなに
簡単に自分の家に案内してしまうなんて、ちょっと安全意识、大丈
夫なのか？

（それこそ、なにか下心がある？　って、いや、まさかなあ……。
）

またも不信が、心に広がっていく。

「さあ、どうぞー！」

ガチャガチャと、少し朽ちたドアを開けた秋山さんは、そんな俺を
招く。

（ど、どうしよう）

ひと仕事、無事に終えてホッとしていた俺だったが、さっき以上
にまたテンパってくる。

俺の中では、生まれて初めて女の子の家に入れるという期待から
来るドキドキと、その女の子が得体の知れず、何が襲ってくるかわ
からないという恐れからのドキドキが、ごちゃごちゃに混ざってい

た。

「お、おじゃまします……」

でも、余りに嬉しそうに招いている彼女を、足蹴にするなどできるはずもなく、結局俺は、少々恐る恐るではあるが、その部屋の入口に近づいて行った。

ドアの影から覗くと、そこはこういうアパートにありがちな、コンクリート打ちっぱなしの簡素なタタキ。でもそんな玄関にはあまりに不似合いな、綺麗に揃えられた上品なパンプスとスニーカー。そして何よりあれ？と思ったのは、汚れやすいはずの玄関先なのに、砂ホコリ一つない。

ん？

改めて部屋の中を伺うと、確かに古くくたびれた建物に違いないのだが、思わず目を見張るほど綺麗に掃除しており、センスの良い調度や装飾が置かれ、みすばらしさなどみじんも感じさせなかった。

さっきまで、警戒していた俺だったが、そんな部屋を見せられると、彼女が荒んで無責任な生活をしているなど考えるのは、全くのお門違いなのだと思えた。

俺は意を決して靴を脱ぎ、横の靴と同じように綺麗に揃えて置くと、奥の部屋のテーブルの横で、ちよつと頬を紅潮させて立っている彼女に、改めてお邪魔しますと挨拶をした。

「ようこそ、お越しくございました」

彼女は嬉しそうにお辞儀をして、それに応えてくれるのだった。

俺はここに至って、もう変な詮索はすまいと心に決め、素直に彼女の勧めに応じて椅子に座った。そこには古くはあるが、良く磨かれたこじんまりとしたテーブルがあり、「一輪挿し」に花が挿してある。

「のど、渴かれたでしょう?」

そう言いながら冷蔵庫を開けた秋山さんは、

「無理矢理、遠くまでお連れして済みません」

と、俺の前にコースターを置いて、麦茶の入ったグラスを乗せた。

「ああ、いや、俺の家もこの近くですから」

彼女はそういう俺の言葉に、特段驚く様子もなく頷くと、また冷蔵庫を開けてる。

(あれ???)

彼女の反応に首をかしげていると、彼女はちよつと緊張したように言った。

「今日はお礼に、お昼ご飯を御馳走させて下さい」

「え? そんな、気を遣わなくつたつて」

「いいえ、今日は本当に助かりました。」

「でも、自転車でちよつと行っただけですし、荷物も配送に頼んじやつたし」

「え? …… あ、でも、あんな風に荷物をお願いするの、わたし一人だという困つたと思います。一度もやったことなかったです」

「そうですか?」

「ええ」

ちよつと頼つぺたをピンクに染めて、目を泳がせている。そして、いきなりガバツと立ち上がったと思つたら、

「お昼用意するんでしたね!」

と、ちよつと大げさに宣言して、小さなキッチンに向かうのだった。

第1章 10

「はい、お待たせしました！」

向かいに座った秋山さんは、笑顔でそう言った。目の前に並べられた、家庭的な料理の皿の数々。いつも学食なんかで食べているものとは、ずいぶん趣が違い、煮物や「お浸し」みたいな素朴な和風料理だ。

ルックスが「極めて洋風」な秋山さんからするなら、これまた似合わないものであった。

でもここに至って、彼女に対していちいち持つてしまう違和感は、もしかしたら彼女の方に原因があるのではなく、俺の彼女に対する先入観に問題があるのかもしれないと、思うようになってきていた。

「あ、あのう、こんなのしか作れなくて……」

「え？ そんなことないです。こういうの、学生生活してるとなかなか口に入らないんですよ」

正直俺は、どんなすごい料理を出してくれるよりも、こういう料理のほうが嬉しかった。秋山さんはそんな俺の思いを、ちゃんと分かってくれたようで、嬉しそうにうなずいた。

俺の一箸目をじっと見守る視線に促され、「いただきます！」と合掌をした後、早速一口食べてみる。

食材は極々ありふれたもののようだったが、料理に日頃頓着しない俺にすらわかるほど、丁寧に作られていた。味付けも絶妙で、物足りなくもなく、それでいて押しつけがましもなく、心地よい味が口に広がる。

ちよつと茶碗を下ろすと、そこには箸を止めて様子を伺う秋山さん。不安そうにこつちを見ている。俺は改めて、美味しいですと頷いて見せると、ちよつとはに cand、ほつとした笑顔になった。

ごはん、煮物、みそ汁、漬物……、ごくごく普通の昼ごはんであ

ったが、それを食べ終わった時、俺は何とも言えないゆったりとした気分浸っていた。

そんな俺を満足そうに眺めている、秋山さんの眼差し。俺は思ってもいなかった、くつろいだ時間を提供してくれた秋山さんに、心から感謝する。

「あ、凄く美味しかったです。なんか、すっかり寛いってしまった……」

初めて訪れた家、しかも女の子の家で、こんなになってしまっている自分の図々しさが、微妙に恥ずかしかった。

「そうですか？ 良かったあ」

彼女は俺のそんな言葉に、キラキラと笑顔を輝かせる。

料理が美味しかったという話の流れで、食事はいつもどうしているかなど、日常の生活についての話題になっていった。

学生生活について、一応は先輩である。役に立つかどうか分からないが、自分なりの経験談を話してみた。彼女は取り留めもない話にもかかわらず、俺の言うことを興味深く聞いてくれた。

こんなにちゃんと自分の話に耳を傾けられた経験が、ほとんど言っていなかったで、なんだか嬉しくなってしまった。

そうこうしているうちに話題は移り変わり、この部屋に案内された時の印象についてになっていた。

いつになく素直な気持ちになっていた俺は、自分の感じたそのまを、目の前の女の子に披露した。そう、外から見た古くて殺伐とした雰囲気とは全く違って、部屋の中はとても綺麗に片づけられ、凄く感心した。そしてとても居心地が良い、と。

「本当に素敵な部屋ですね」

「あ、ありがとうございます」

「なんだか、不思議と落ち着く雰囲気です」

「そうですか？」

ちよつと頬を赤らめ、嬉しそうに微笑んだ。

「俺なんて、男の一人住まいで、片づけ下手だから、家の中なんてごちゃごちゃで」

「え？ 本当に？」

どれほど感心しているかを強調しようと、何も考えずに口にしたボケだった。俺は間違いないく、「先輩、そうなんですか！」とか、笑いながら突っ込んでくれると思っていた。

しかし、そこで彼女の顔は驚いた表情のまま固まってしまったのだ。

（もしかしたら、「部屋が散らかっている」ってのは、「地雷」だった?!）

いきなりの雰囲気の変化にひたすら狼狽える。

（おい、どうしたら良い？、どうフォローするんだよ？）

頭は焼け付きそうなほど回転しているが、ただ空回するばかり。そもそも気の利いた言葉など、平素でも無理な俺である。こんなに状況で思いつくはずもないのだ。目を瞬かせながらじっとこっちを見つめる秋山さんの視線が痛くって、俺は目を泳がせることしか出来ない。

かくして最悪な空気の中に頭を突っ込んでしまい、さっきのほんわかとした雰囲気からの余りの落差で、俺の心は茫然自失状態となつてしまった。

どう足掻いても、好転は期待できないほどズブズブになったと判断した俺は、ここは潔く撤退するしかない、ため息と共に覚悟を決めた。

「あのう、じゃあ」

暇を切り出そうと口を開こうとしたとき、それに被るように秋山さんが話し始めた。

「そんなに、お忙しいとは知らずに、こんなことお願いして……」

「はあ？」

秋山さんが沈痛な声で口にした言葉は、謝罪の言葉だった。

「普段はおうちの外まで、あんなに綺麗にされる方なのに」

「なんのことでしょう？」

「だから、外をあんなに……」

益々話が見えなくなつて、目を瞬かせている俺に、何かを説明しようと思ふ身を乗り出したところで、彼女はいきなり青くなつて固まつた。

「あ、済みません、俺、ちょっと話が」

「い、いいえ、なんでも……ないです。本当に今日は、済みませんでした。なんでもありません」

青くなつた彼女は、手をヒラヒラさせて、必死になつて前言を撤回する。そして見ていても可愛そうになるほど、クシユンと小さくなつてしまった。そんな彼女をそれ以上追求できなくなつて、俺は口をつぐんだ。

それにしても、自分の失態だと思つていたところに、こんなリアクシヨンされて、これまた困つた。

「いや、謝つてもらふことは、全く無いと思うんですが？」

「いいえ、兎に角、そんなにお忙しかったとは知らなくつて、変なお願いした上に、こんな風にお引き止めしちゃつて」

もしかしたら、部屋が汚いのは俺が忙しいからとだと思つてるのか？

そういう考えがどこから出てくるのかと、必死に解析しているうちに、あれ？？と気づくことがあつた。

（彼女、そう、「外をあんなに綺麗にする」って言つたぞ）

「外」といつて、唯一思い当たると言えば、秋までやつていた道端の掃除ぐらい。秋山さんはその事を知っているような話ぶりである。

二次試験のころここに引越してきたと言つていた。しかし、それまでもここら辺りに、住んでいたということなのだろうか。次々と疑問が湧いてくる。

記憶に残っている顔を検索し始めるが、一向にそれらしき物は見つからない。忘れたか？ 気づかなかつたか？ いや、早朝のこと

だから、そこを通って通学とか通勤の人ばかりで、顔ぶれはほぼ毎日同じなのだ。

「先輩！ それよりも、あ、あのう、わたし、何かお手伝いで来ませんか！？」

彼女は考え込む俺に、突然、掴みかかるような勢いで提案してきた。驚いた俺は、思わず彼女の顔をまじまじと見る。

「手伝い？」

「そうです、わたしのことで、お手間取らせて、ご迷惑をお掛けしたことですし」

「いや、迷惑って言われても……」

迷惑だなんて、一瞬たりとも思っていなかったので、苦笑するしかない。しかし、そんな俺を見て、彼女が悲しそうに唇を噛むのを見ては、そのまま無碍に、突き放すことは出来るはずはない。

「あ、ちよつと、どうしよう……」

もしもだ、ここで何か手伝って貰うとしたらどうだろう。学校の勉強は新入生の文学部の子に頼むことなんてないし、サークルだったて言わずもがなである。

えっと、手伝い、てつだい、テツダイ……

やはり「手頃な手伝い」なんて、急には思い浮かばない。時を経るに従い、秋山さんの俺への期待の色は強いものになり、もう何でもいいから頼まないと、話が収まりそうにもなさそうな雲行きになってきた。

二人でジーツと見つめ合いながら、お互い、手伝いについて考えるに耽っていると、急にポツと彼女の顔が赤くなった。そして、フツと視線を外すとモジツと体をくねらせた。

清楚な秋山さんがそれを見ると、妙に女性の色香が際立って、女性耐性がない俺には、余りにも強すぎる「萌え」衝撃であった。

（た、頼むから、唐突に萌え殺さないで欲しい。）

一人、一瞬頭の中が真っ白になりながら、悪態をつく。しかし顔が

火照るのを隠しようもなく、ひたすら慌てる俺に、彼女はちよつと震える声で話し始めた。

「あ、も、もし宜しければ」

「宜しければ？」

そう言ってこっちに向けた秋山さんの顔は、さらに思いつめた顔だった。

これまでも、散々驚かされ続け、どうにか少しずつでも耐性が出来かけてきたかと思っていたら、ここにきてまだ上を行きそうな雲行き。

いや待て、ここまで恥ずかしそうにし、かつ思いつめてるって、まさか、まさか……。

俺は一瞬、彼女の胸元の豊かな盛り上がりを目が行った。俺は心臓が急に早鐘のように鳴り始めようとするのを、頭を振って無理矢理に押し止める。

（いや、いくらなんでも、そんなことあるわけないだろ。絶対にない！）

……だがもしそうだとしたら、それこそ本格的に危ういぞ、この人。

流石にそこまでするとなると、それこそ裏があるということを考えざるを得ない。せつかく落ち着いてきたのに、またもや頭の中がゴチャゴチャになり始め、やっと獲得した安心といきなり飛び込んできた不安が頭をクラクラさせる。

「わ、わたし、」

「はいっ」

ゴクリと俺が生唾を飲み込んだところで、彼女は勢いよく宣言した。

「お部屋をお掃除に上がります！」

そ、そう来たか……

やっぱり俺にしてみれば、盲点を突く提案だった。でも掃除が上手いと褒めておいて、部屋が汚いと言ったら、こういう答えになるのは必然だと気付いた時には、もう後の祭。

「わたし、大したことできませんが、お掃除だけは好きだし、一応、人並みぐらいは出来るかなと思ってているんです」

「あ、それは、もう、人並みどころなんてものじゃなく」

間違いなくハイレベルの「クリーナー」だと思ってますと、必死で頷いて見せる。

だが、うちに掃除に来てくれるなんてことは、大いに問題がある。やっと知り合いになったぐらいの付き合いで、「あの部屋」を掃除をしてもらうということは、それこそ決定的な意味を持つのだ。俺は丁重に遠慮申し上げた。

「あのう、大変ありがたいんですけど」

拒否の空気を感じ取った彼女は、目を伏せて言った。

「ご迷惑……ですね」

目の前で、風船がしぼんでいくように、見る見るクシュンとなっていく秋山さん。

「いや、迷惑というんじゃないって、」

「確かに、いきなりお宅に伺うなんて、ずうずうしかったです。済みません」

拒否されてガッカリしていながらも必死に笑顔を作り、俺に気兼

ねをさせまいとしようとしている彼女を見ていて、堪らなくなった。

「あ、あのう、じゃあこうしましょう。俺、先に帰ってある程度」

「え？」

「だから、ちょっと後から来てくれますか？ 準備しますんで」

「準備って、……お掃除？」

「あ、まあ」

「それじゃあ、折角」

「ダメですか？」

「……えっと、そうですね」

彼女、しぶしぶ頷く。

まあ秋山さんは、俺の手伝いとして掃除をしようとしている訳で、俺が彼女のために手間を取るということが本意なのは、当然ではある。となると、もう納得してもらうためには、本当の理由を言うほかはない。実情を知らずにうちに来て、現場で愕然とさせるより、ここで白状して納得してもらう方がフェアというものだ。

俺は覚悟を決め、もうどうにでもなれと、俺は我が家の惨状を克明に詳述し始めた。

「あのですねえ」

「あ、はい」

「まず、床が見えません」

「はあ、絨毯でも？」

「いえ、新聞と脱ぎ散らかした服です」

「あら、まあ」

「テーブルの上には、カップ麺の食べかすが、山になっているんです」

「そうですか」

「おまけにキッチンには、洗っていないお皿が山を作っています」
「それは大変！」

目を瞬かせながら、じっとこっちを見つめる秋山さん。

……これで終わったと、俺は思った。きつともう、飽きれて目も

合わせてくれないだろう。まあ、掃除に来るなんて話はこれで頓挫しただろうから、ヨシとしよう。

俺は安どと落胆で肩を落とし、また一つため息をついたところで、彼女はガバツと立ち上がった。きつと俺の前にいるのが、いたたまれなくなつたのだ。

沈んだ心を持って余しながら、立ち去つた彼女の背中を追つた。

「ええと、エプロンもいるんですね」

「え？」

「お掃除だけでなく、お片づけも、洗い物も、洗濯もあるんですたら」

「ちょ、ちよつと……って」

秋山さん、キッチンにかけたつたエプロンをたたんで、さつき持っていたトートバックに詰めるところを振り向いた。

啞然としてなお椅子に座っている俺に、見るからにヤル気満タン、キラキラと目を輝かせながら言った。

「準備できました！」

彼女は俺が思っているのより、もっともっともーっと、上を行っている人だっただけらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7448x/>

A Beautiful Cleaner

2011年11月29日12時53分発行